松本時代の北杜夫　其の一
――『寂光』に映された父茂吉の陰影――

竹内　正（日本歌人クラブ会員）

はじめに

小説家、エッセイスト、精神科医、そして医学博士でもある北杜夫（本名齋藤宗吉、歌人・医師の齋藤茂吉の二男、昭和二年五月一日～平成二十三年十月二十四日）の作風は実に驚くほど多彩であり、多岐にわたっている。その代表作『楡家の人びと』（昭和三十九年、第十八回毎日出版文化賞）、『夜と霧の隅で』（昭和三十五年上半期、第四十三回芥川賞）、『輝ける碧き空の下で』（昭和六十一年、第十八回日本文学大賞）、そして初期の『幽霊』等を始めとした純文学のジャンルを描く一方で、自らをマンボウと称し描く『どくとるマンボウ航海記』『どくとるマンボウ青春記』等ユーモア溢れるマンボウもののエッセーは、小説以上に広く読み継がれている。更には、『奇病連盟』『高みの見物』等のユーモア中間小説、『怪盗ジバコ』『父っちゃんは大変人』『さびしい王様』、「うつろのなか」等ファンタジーやSFと分類されるもの、『船乗りクプクプの冒険』のような児童文学や童話。そして、父茂吉の生涯を描いた茂吉評伝四部作（平成十年、第二十五回大佛次郎賞）の伝記や、歌集『寂光』[1]に短歌をも残している。また彼は、平成八年には日本芸術院会員となり、平成二十三年死去後に日本政府より従四位に追叙され、旭日中綬章が追贈された。

こうした裾野の広い数々の作品を残した北杜夫という高峰を読み解く糸口として、まずはその文学的な出発点ともいえる信州松本における旧制松本高等学校（以下「松本高校」）時代に目を向け、彼が当時「寂光集」と名づけた手帳をもとに後年出版された、唯一の歌集『寂光』に焦点を当ててみたいと考える。

杜夫は、これまで様々な文章に松本高校当時の記憶を残している。初期詩篇、『どくとるマンボウ青春記』『マンボウ思い出の昆虫記―虫と山と信州と』[2]はもとより、『楡家の人びと』『幽霊』『牧神の午後』『少年』『神々の消えた土地』等、数々の作品の舞台として描く一方で、かけがえのない記憶としてエッセーに著している。茂吉評伝四部作では短歌の解釈に触れながら、その人物評を綴り、肉親の杜夫でしか語れない松本高校時代の思い出を交え伝記を記している。その茂吉評伝の第一部『青年茂吉―「赤光」「あらたま」時代』の「Ⅰ「赤光」時代」には「私はゲーテやヘッセやカロッサ、そしてトーマス・マンよりも、まず最初に茂吉の歌によって、文学愛好者と変じたのである。まさしく恥ずかしいことだが、もはや初老を過ぎた私は厚顔にも更めてこのことを書き記す」（傍点引用者）とあり、父茂吉の短歌との濃厚で親密な関係を示唆している。

本論考では、まず松本時代の杜夫と茂吉の履歴を比較しながら

たどり、松本高校入学の経緯を明らかにしてみたい。更には、松本高校時代に杜夫が耽読した茂吉の短歌を引きながら、その出会いの意味するところを探り、『寂光』の解釈へとすすめていきたい。解釈に当たっては、茂吉の短歌、松本時代についてのエッセー、松本を舞台に描かれた小説・自伝的小説等を手がかりに、『寂光』詠草の背景を明らかにし、徐々に松本高校時代の杜夫の内面に迫り、作品の解釈をすすめていきたいと考える。

一、杜夫と茂吉の年代記[3]（松本時代）

1　昭和十九年（杜夫十七歳[4]、茂吉六十三歳[5]）

二月、杜夫は麻布中学四年修業で高校に入ろうと受験勉強をし、三月、日本アルプスと信州の珍しい蝶に魅せられて松本高校を受験したが不合格となった。つづいて同月、東京帝国大学臨時付属医学専門部（以下「帝大医専」）を受験し合格となった。杜夫は松本高校を翌年再受験することを願ったが、茂吉の命により、四月、帝大医専に一旦は入学した。しかし、旧制高校に憧れていた杜夫はもう一度松本高校を受けたいと茂吉に希望し、父も悩んだ末これを許可した。すぐに帝大医専の入学辞退手続きをとり、麻布中学の五年に復帰した。しかし授業はなく、大森の軍需工場に動員された。勉強のない長い休暇がつづき、一ヶ月に七本も映画を見たり、ピンポンや将棋等をしたりして遊ぶことが多い日々が続いた。十一月、姉・百子が結婚し、暮れ頃より杜夫は再び試験勉強を始めた。しかし、学科試験が行われなくなったため、作文の勉強に精を出した。この頃、作文の添削会に入ったが、フィリピンの基地を飛び立つ特攻隊の感想を書いた作文が一等となり、模範文として印刷されることもあった。また、勤労動員の月二十五円の報奨金で昆虫の専門的図鑑や当時好きだった広沢虎造の浪曲のレコードを買った。

一方、茂吉にとってこの年は、敗戦前の強羅行（七月十日から八月三十一日）の最後の年となった。二月五日に長男茂太が応召され、国府台陸軍病院に入隊となった。また、茂吉の義弟に当たる米国が結核で六月十日に死去した。茂吉は夏には箱根強羅に滞在し、「作歌四十年」の執筆を続け、七月には『童馬山房夜話（第一）』[6]、九月には同第二を八雲書店より刊行した。十一月十八日、長女百子が宮尾直哉と結婚する中、戦局は急迫しB29による東京空襲が始まり、十二月には「アララギ」が十二月号を以て休刊となり、敗戦の色が徐々に濃くなっていった年であった。

2　昭和二十年（杜夫十八歳、茂吉六十四歳）

一月、繰り上げの入試があり、杜夫は松本高校を受験し理科乙類に合格した。押し迫った戦局から、そのまま中学の動員先で働かされた。この頃、父の書斎から持ち出した本を読み、憧れの高校生に変身しようと、帽子・下駄等の外形づくりに凝り「憂行」[7]という号を考え出して使用し始め、高校時代はそれを通用した。



三月、茂吉が山形に疎開し、兄茂太は軍医として入営した。齋藤脳病院本院から戻ってきた母[8]と妹の三人で家を守る暮らしとなった。三月の空襲で杜夫は友人を失うが、そのうちの一人から借りていた『昭和風雲録』[9]を回し読みすることがあった。四月十六日、動員先の工場が全焼し、月末の動員が一時取りやめとなった。この頃、島崎藤村の感傷的な詩を愛唱し、蒲生君平、西郷南洲等の憂国の漢詩を好んで読んだ。

しかし、やがて五月二十五日、東京最後の夜間大空襲で青山の自宅が焼かれてしまった。この時杜夫は逃げる中、火の粉をかぶり翌朝まで半盲となった。また、麻布中学校の自然科学班の頃に集めた百箱に及ぶ昆虫標本（コガネムシだけで四十箱）をすべて灰にした。ひとまずは小金井の宇田家[10]の世話になり、そこで初めて茂吉の歌集『寒雲』を読み感動した。

六月十五日、杜夫は茂吉のこの歌集を持ち、一人松本へ向けて出発した。この年の上級学校への入学は八月だったが、編入通知書を悪友と偽造し、二十日ごろ、松本高校の「思誠寮南寮三号」に入った。その夜、さっそく説教ストームの洗礼を受け、「寮にきて何を感じたか」の問いに「お手洗いの水が出ないんで困ると思いました」と言うと、大声で怒鳴られた。このとき、寮の先輩に、後の大親友、辻邦生がいた。この頃、茂吉の自選歌集『朝の蛍』を手に入れ、愛読した。二十四日には、さっそく憧れていた王ヶ鼻に登った。

しかし、せっかく入った寮が食糧難で閉鎖されたため、茂吉の疎開先、山形へ生まれて初めて行き、七月二日から十日まで茂吉のもとで過ごすこととなった（一度目の金瓶での生活）。[11]そこで『赤光』『あらたま』と再び感動的な出会いをしていくこととなるが、詳細については本論三に述べていくとする。杜夫はその後一旦上京し、再び松本へ行く。七月下旬、切迫してきていた戦局に杜夫は死を覚悟していた。死ぬ前に一度は行ってみたいと思っていた当時は人が誰もいない上高地に、「松本で父の関係からさまざまな世話を受けた」[12]与曾井湧司の子豊と初めて行き、西穂高に登った。このころから折に触れて短歌を書き記すようになる。

八月、正式に松本高校の入学式があったが、そのまま大町のアルミ工場に動員され、そこで終戦を迎えた。またもや居場所がなくなった杜夫は、八月二十八日から九月十二日まで、再び山形の父のもとに身を寄せた（二度目の金瓶での生活）。その後、九月二十日、学校が再開され、「思誠寮中寮二号」に入った。

学校が再開されると休講が多く、上級生が軍隊より帰ると校長退陣要求などがおこり、バンカラに感化されていった。ゲーテ・河合栄次郎・カント等を毎月二十冊あまり読むようになり、秋の駅伝では選手として出場した。

十二月一日、杜夫は南松本に新たに設けられた「思誠寮西寮」に移ったが、食糧難のため一日で閉寮。学校も春までおよそ四ヶ月間の休校となった。仕方なく帰京し、一時は親戚の宮尾家[13]の厄介になったが、同月中旬には、茂太が東京で見つけた家（杉並区大宮前六丁目）で過ごすようになった。杜夫は留守番をすることが多く、闇市や神田の図書館に通うこともあった。

一方茂吉は、戦局が益々不利に傾く中、東京大空襲を前に疎開の準備を始めていた。二月中旬、疎開の打ち合わせに上山の高橋四郎兵衛宅（現在の山城屋）に赴いていた。四月には、齋藤家（当主西洋）から分家し、単身疎開し、四月十日上山に赴き、十四日から郷里金瓶の齋藤十右衛門方（妹「なを」の嫁ぎ先）に身を寄

せた。同月、『文学直路』（青磁社）、歌集『浅流』を刊行した。五月には、松原町の本院を東京都に譲渡し、梅ヶ丘病院となったが、二十五日の東京大空襲では旧松原本院、青山の病院及び自宅を焼失した。六月六日には妻輝子と次女昌子が金瓶を訪れて再会し、共に八月十五日の終戦を迎えた。しかし輝子は敗戦となると茂吉の「反対を押し切って、ほとんど灰燼と化した東京へ」[14]戻っていった。茂吉はその後、年末にかけてしばしば大石田に赴き、同地の歌会に出席している。九月にはアララギが復刊し、民主主義文学運動が勃興していった。

このように、昭和二十年終戦の年は、杜夫が山形に移動した七月二日から十日までの一時期、茂吉一家が山形の郷里で共に暮らした日々があった。

3　昭和二十一年（杜夫十九歳、茂吉六十五歳）

杜夫は一月二十七日に東京を発って、二十八日より山形の上山で叔父高橋四郎兵衛が経営する旅館・山城屋へ移り、屋根裏部屋で暮らした。同月三十日、茂吉は金瓶から大石田に移った。「日記四」（『齋藤茂吉全集第三十二巻』）によると、その間二月十八日から二月二十日まで杜夫は大石田の茂吉のもとを訪れている（一度目の大石田茂吉との生活）。杜夫はその後、二月下旬に東京に出たが、間もなく三月、学校が再開された。すぐに試験があり二年となったが、杜夫は委員として寮に残った。愛唱するようになった父の歌の中でもことさら感傷的なものに惹かれ、校友会の小新聞に短歌を発表した。校友会の新旧委員交替の席上では、酔って二人の教授の頭をなぐってしまうが、この出来事が縁となって、望月市恵と親しくなり、トーマス・マン、リルケへの道を開かれることとなった。この頃は食料が手に入り次第しばしば山に登っており、短歌を寮報等にも発表した。

六月、食糧難で試験も中止、早々と夏休みとなり、茂吉が世話になっていた大石田に行き、六月二十八日から八月二十三日まで茂吉のもとで過ごした（二度目の大石田茂吉との生活）。当時は、最上川の川辺等を父と一緒に散歩し、茂吉の作歌する苦悩を間近に見、感銘を受けた。食料に困らぬ恵まれた境遇の中で、杜夫はシェイクスピアとドストエフスキーをほぼ全部読み、ニーチェもかなり読んだ。ドストエフスキーの長編『悪霊』の黒いユーモアの部分を抜き書くこともあった。この夏は、小説を書き出し、「才五郎」「虫けら先生」等を書き、懸賞小説に「虫けら先生」を応募したが失敗した。ほかにも少女趣味の小説「山百合」を書いた。この頃は、夏目漱石の「三四郎」の文章に感心したこともあった。

九月一日、茂太が世田谷区代田一丁目に家を買って移った。

九月に学校が始まると杜夫は西寮総務として新入生を迎え、ストームやコンパ、カボチャの買い出しに情熱を燃やした。すぐに試験が行われたが、委員は全員さぼった。秋には卓球部に入り、東大で開催されたインターハイに出場した。また、卓球部キャプテン、運動部総務に選ばれ、記念祭では対外宣伝部長としてジャンボン行列[15]を演出しポスターを一人で描き、演劇「ドモ又の死」に瀬戸の役で出演し大活躍をした。中学時代は気弱であったが、このころは、並はずれて汚い服装、不思議な情熱によって、徐々に頭角を現すようになった。そして十月には、寮総務として新入生を迎えた。

杜夫が高校時代を謳歌していた当時、東京では、茂太が慶応の医局勤務のかたわら夜間には自宅で開業した。

一方茂吉は、この年先のように一月三十日、単身大石田町へと移り、二月から素封家の二藤部兵右衛門の離れ（聴禽書屋[16]と名づく）に落ち着いた。三月には『童馬山房夜話（第三）』（八雲書店）を刊行したが、同月十三日より左肋膜炎に罹り、五月上旬まで病臥の生活を続けた。四月、佐藤佐太郎らの手によって選集『淺流』（八雲書店）が刊行、同月二十八日には孫茂一（茂太長男）が生まれた。八月には第三歌集『つゆじも』（岩波書店）が刊行された。夏頃から病が癒え、秋に入って瀬見温泉などに保養した。十月、昭和二十二年御歌会始選者となり、以降昭和二十六年まで務めた。同月、『童馬山房夜話（第四）』（八雲書店）を刊行。この頃、盛んに絵を描いた。







4　昭和二十二年（杜夫二十歳、茂吉六十六歳）

三学期には、寮生活にも沈滞ムードが漂い、トランプや占いが流行した。仲間数人で少年への愛を誓い、太陽党（ゾンネン・パルタイ）なる集団を結成し、気にいった下級生にブルンネンという名をつけて悦に入った。一方、この頃から短歌のほかに詩作も始め、高村光太郎・萩原朔太郎・中原中也・三好達治・大手拓次・立原道造等の詩を耽読した。またこの年、寮歌に応募し「人の世の」が入選した。松本高校二年の終わりごろに、ついに山形の茂吉に歌稿を送ったところ、その何首かは○がつけられており、「父の赤光時代の歌に似ている。勉強の余暇に、少しずつ作ってみるがよい」[17]という意の返事をもらい有頂天になり、三度ほど歌稿を送った。三月の春休みには、名古屋の卓球大会の個人戦に出場した。

四月、三年になり、寮を出て下宿（松本市県町北区）し、五月には卓球部主将、校友会運動部総務を務め、インターハイ、駅伝に活躍した。夏休みは東京の兄のもとで過ごすが、徐々に将来の進路に迷いを持ち始めた。

九月、再刊された校友会雑誌「山脈」にエッセー「六脚蟲の世界」が掲載される。当時もやはり昆虫採集は続けており、珍しいメスアカムラサキを見つけることもあった。

十月、ファーブルにあこがれ、動物学志望の手紙を茂吉に出したが、生活難を心配し、外科医にさせたい茂吉の強い反対にあい、初めて父の意志に反抗する手紙のやり取りをした。最終的に、茂吉から、「愛する宗吉よ　速達便貰つた　○父を買いかぶつてはならない。父の歌などたいしたものではない。父の歌など讀むな」[18]にはじまる手紙をもらい、ついに茂吉に屈服し医学の道を選んだ。この時茂吉は、教授から成績が二十九人中十四番であると聞かさ

れ、余計怒った（茂吉の書簡によるが、杜夫の記憶では一クラス四十人以上いたという）。

茂吉の強制に動物学を断念するが、神経衰弱になり、その鬱鬱たる心情から回復するため、リュックに乏しい食料をつめて徳本峠から穂高の偉容を見に出かける。この頃、心の悩みを語りあえた友人は文科の学生で、なかでも辻邦生と堤精二の二人だった。

杜夫は十二月には、松本市若松町若松館の下宿に移ったが、「銅の時代」[19]によると「寮を出てから一年間に五回、家を移ったことは確かだ」という。この年、「淡い錬金術の物語」と仮題を付した長篇にとりかかった。またこの頃、京都へ行ったが銀閣寺を見ただけで一週間友人のアパートでごろごろしていた。

一方茂吉は一月以降、「アララギ」に「茂吉小話」を連載し始め、二十六年三月に及ぶ。同月には『短歌一家言』（齋藤書店）、四月、『作歌實語鈔』（要書房）と『万葉の歌境』（青磁社）を続けて刊行した。

四月になると、酒田・上山・秋田・宮内などにしばしば遊び、猿羽根峠や最上川難所なども訪ねた。五月は『童牛漫語』（齋藤書店）、八月、第四歌集『遠遊』（岩波書店）を刊行。この間は歌作も旺盛で、「ひとり歌へる」（五月「人間」）、「上山の雷」（七月「八雲」）などの大作を発表した。また、八月十六日には、東北巡幸の天皇に上山の村尾旅館で短歌について言上した。

その後、十一月三日には板垣家子夫[20]に付き添われて大石田を去り、翌日帰京、世田谷区代田一丁目四百番地の新居に入る。十一月下旬、「時事新報」の依頼で「椋鳥印象記」（翌年一月同紙に掲載）のため東京下町の戦後風俗をさぐった。

二、松本高校入学の経緯

杜夫は生前、「北杜夫―すばらしき仲間たち―」（昭和五十六年放映）というトーク番組に出演したことがあった。松本高校にて同校卒業生の小塩節（ドイツ文学者）・熊井啓（映画監督）らと共に、当時の旧制高等学校生の懐かしい思い出を語った。引用者によるテープ起こしの記録であるが、当時の杜夫らしい口調が滲み出ていると考え、紹介する。冒頭、小塩の問いかけに杜夫は次のように答えている。（名前は引用者）

そもそも、どくとるマンボウが若き日に松本をお選びになったのはどういうわけですか。（小塩）

僕にはあの、昭和十年頃の一番いい時代の叔父がいたんです。コンパと言えば朝まで芸者さんあげて遊ぶとか、そういういい時代の叔父のアルバムを見ますと山も素敵だし、マントを被ったところも颯爽としているし、こういうとこ行けたらなと思って、それと昆虫なんです。でまず、山よりも先に昆虫を求めて、まあ松高を志望しまして、四年で一年しくじりまして、五年でようやく入れたんですけど。（後略）（杜夫）

杜夫自身がこう語っていたように、杜夫の松本高校志望の動機は、叔父のアルバムからの松本高校への憧れ、そして昆虫であった。晩年の「神河内」[21]には昭和二十年当時の心境を回想している箇所がある。

私はいずれ自分が死ぬことを怖れてはいなかった。しかし、憧れの白線帽をかぶり、中学とはおのずから別世界であろうせっかく入学できた松本高校に、一刻でもあれ入ってみたかった。私の叔父[22]はかつて松高生で、当時は出征していて日本にいなかったが、その残されたアルバムを見ると、私の松本

に対する憧れはいやがうえにもかきたてられて行った。残雪を戴く峨々とした高山や一面のお花畠を背景に、いかにも颯爽とした黒マントを羽織った松高生の写真、それはまだ箱根くらいまでしか旅をしたことのない私にとって、さながら別天地のように思われた。それに加えて、当時私は昆虫マニアであり、信州には特産の珍種が沢山いた。（後略）（傍点引用者）

ここで昆虫マニアの杜夫に若干触れておく。昆虫は杜夫の文学にはしばしば描かれ、『寂光』の短歌にも詠まれている重要な題材の一つである。彼の昆虫好きは少年期に始まるが、晩年「どくとるマンボウ昆虫展」[23]が信州大学松本キャンパスで開催されたことでも広く知られるところである。喜美子夫人も「主人は虫好きで、旅行とかのちょっとした外出には、必ず虫捕りの網を持って行っていましたね」[24]と証言するように、その熱心さは年齢を重ねても変わることがなかった。また『どくとるマンボウ青春記』や『どくとるマンボウ昆虫記』のエッセーの内容を繰り返し小篇に綴る杜夫に対して「あなた、この話、前に書いていたでしょ」[25]と夫人が指摘すると、杜夫は「いいんだ、これで」と答えていたという。杜夫が年をとっても少年の心を失わず、信州や昆虫に対して尽きせぬものを抱いていたことがうかがえる。

杜夫が初めて昆虫採集をしたのは昭和十二年、十歳（小学校四年）の夏休み、宿題に昆虫標本制作が命じられた時であった。友人の標本の出来栄えが自分のものよりも素晴らしかったことで火がついて、『昆虫図鑑』の存在を知り一年間貯金をした。夢中になって高価な『原色千種昆虫図譜』を購入したと思ったところ、実は慌てていて『原色千種続昆虫図譜』となっているのに気づいたというユーモアのあるエピソード[26]が残っている。その後、昭和十四年一月（杜夫十二歳）には急性腎炎に罹り、家人より正篇[27]を買ってもらい、病床で虫の名前を覚えていった。

麻布中学校では博物班に入り、夏には毎年箱根の祖父時代からの山荘へ行き、ことに早雲山に登って「大涌谷から降りるコースをとって昆虫採集に熱中」[28]していった。標本箱も徐々に増えていき百箱にも及ぶほどとなった。ところが、前述のように、昭和二十年五月二十五日の空襲で青山の自宅が焼かれ、杜夫にとって宝物であった昆虫標本はすべて灰になってしまった。こうした昆虫愛好家の杜夫は、昭和十八年中学四年修業で松本高校に入ろうと受験勉強を始め、昭和十九年三月には受験したが失敗。帝大医専に合格し四月に一旦入学したが、高校生活に憧れ、茂吉容認のもと麻布中学の五年に復帰。そして、翌年杜夫は松本高校理科乙類に晴れて合格となった。

ところで、中学四年で高校受験に落ち、帝大医専に合格した杜夫に対し、当然中学五年に進むつもりであった杜夫への茂吉の勘違いが興味深い。茂吉は戦局を考え、「学問もせずに兵隊にとられるのではないかと、必要以上に心配し」[29]平福百穂の子一郎[30]に相談し、一旦は「医専に入れと命じた」[31]にも関わらず、杜夫が帝大医専に通いだして三日目にはその話は逆転し、次のような言葉を交わし中学復帰を認めていった。（名前は引用者）

「お前は一体いくつだ？」（茂吉）
「十九（数え年）です」（杜夫）
「そうか。それならまだ兵隊にとられないかな？」（茂吉）

そして父は私に本当は高等学校へ行きたいのかときき、それならもう一年やってみるかと言った。専横にはちがいないが、父はあれこれと息子の将来を考え悩んでいたことは事実であ

る。[32]

昭和十九年の三月から四月にかけての茂吉の「日記三」（『齋藤茂吉全集第三十一巻』）には、杜夫の進路を心配している記述が多い。

三月九日　○夕方宗吉カヘリ來リテ、試驗失敗ナリシコトヲ告グ、ソレカライロイロ話シタ、「オトウサマノ方ガ少シ興奮シテヰルヤウダナ」ナド（後略）

三月十日　○夕方茂太カヘリ來ル。宗吉と三人ニテ床中ニテ話シナドス。

三月十七日　○宗吉ノ帝大醫專ノ受驗ヲオクツテ行ツタ（後略）

三月十八日　○宗吉試驗第二日、物象ニ鑛物ガ出テメンクラツタ由（後略）

三月二十六日○宗吉帝大醫專ノ試驗第一次パスセリ、第二次ハ明日ノ由ナリ。（後略）

三月三十一日○宗吉、東京帝大臨時醫学専門學校入學合格（中略）○宗吉大體醫專ニキメタ。

四月一日　○作歌試ミタガ出來ズ、九時ニ平福一郎氏來訪、宗吉ノコトヲ談合ス。イロイロ委シク話サレ、醫專ニキメテモヨイト云フゴ意見デアツタ。（後略）

四月三日　○西洋來リ、宗吉ノ入學ノコトニツイテ來テクレタガ結局醫專ニ入學承認スルコトニシタ。

四月四日　○宗吉麻布中學ニ行キ、退學届ヲ出シタ。（後略）

四月八日　○宗吉ノ入學式ガ今日帝大病理解剖教室ノ大教室ニテアツタヨシ、午睡ノサメタコト[原]、宗吉カヘリ簡單ニソノ模様ナド話シ、滿足シテ居ル様子デアツタガ、○夜半ニイロイロ思ヒナヤンデ解決ガツカナカツタ。

四月十日　（前略）○午後急ニ思ヒタツテ病理教室ニ平福氏ヲ訪ヒ宗吉ニツキ、意見ヲ問フ　○靖國神社參拝、九段下ニテ市立食堂夕食、通ニテ宗吉ヘノ土産萬年筆ヲ買フ。夕食ノ時ニ宗吉ノノートヲ見テ感心シタ　○醫專ニツキ宗吉ノ本當ノ意見ヲキキタルニヤハリ高等學校ヲモー一度受驗シタイト云フ。終夜決定シカネ、眠リカネタリ。

四月十二日　○守谷ヲ頼ミ醫專ニ退學願ヲ出ス。（後略）

（傍点引用者）

茂吉のこの日記を見ると、行間から、父の思惑を受け止めながら一旦は帝大医専を受験し合格、入学するが、数日通っても、どうしても松本高校をあきらめきれず、もう一度受験したいという本心に揺れる杜夫の心境が読み取れる。またその一方で、せっかく合格した帝大医専に通わせるべきか、息子の希望を生かしてやるべきか、揺れる茂吉の心中が明瞭である。茂吉の杜夫への気遣いや心配が夜も眠れぬほどであり、平福らに相談してはみたものの、結局は杜夫の願いをかなえる方向で進路を決定していくという当時の葛藤が読み取れる。この日記から、先の杜夫と茂吉のやりとりは四月十一日頃であったと推察できる。

杜夫が松本高校を志望する動機と経緯は以上のように概観することができるが、ここでもう一つ茂吉の「心づもり」について付

記しておきたい。先の日記に「眠リカネタリ」とあるように、茂吉の心配ぶりには並々ならぬものがあったと思われる。杜夫の進路となると、松本高校卒業時には動物学志望の杜夫に猛反対し、医学を志すよう半ば強引に説得していくほどの頑なな茂吉である。しかし、松本高校再受験については一転して認め、杜夫の本心を受け止めたのはなぜだろうか。医学の道を志させるには、帝大医専を急がなくても道はあると心得ていたことはあるにしても、それだけではなかったように思われる。

それは、信州・松本と茂吉との繋がりである。昭和十九年当時の茂吉は戦局悪化の時期にも関わらず、強羅に滞在しながら『童馬山房夜話』を刊行し、「作歌四十年」の執筆をつづけ、文筆への姿勢を崩すことはなかった。それまで「アララギ」に精力的に執筆をつづけてきた茂吉は、上諏訪の島木赤彦をはじめ、信州各地に多くの歌の知人をもっていた。松本においてもそれは例外でなく、昭和二十年七月下旬に杜夫が初めて上高地を訪れる際も茂吉の知人与曾井湧司の子、豊に上高地の案内を依頼している。茂吉は杜夫が上高地から帰った八月に、山形から与曾井湧司に宛てて以下のような書簡[33]を送っている。

〔八月十五日　長野縣松本市中上町　與曾井湧司様　金瓶齋藤方より（はがき　齋藤てる子との寄書）〕

拝啓御懇書本日いただき申上候、宗吉は一方ならぬお世話さまに相成り又今般は上高地まで御導き下され宿屋等萬端の御芳情に接し候趣、千萬ありがたく御禮申上げ候なほ今後ともよろしく御願申上げたく（後略）

そして、このとき杜夫が泊まった宿屋であっても、茂吉はすでにそこを昭和八年十月に大橋松平と訪れている。「茂吉　日記二」（『齋藤茂吉全集第三十巻』）には「十月二十日→十月二十三日大橋松平君ト上高地、白骨温泉行」とあり、その時の作品は昭和八年の「高山國吟行」（『白桃』）に収められている。

上高地温泉旅館（現在上高地温泉ホテル）は上高地にある天然温泉の宿として、多くの文人墨客が滞在した歴史あるホテルである。滞在した文人は芥川龍之介・尾崎一雄・若山牧水・齋藤茂吉・高村光太郎・安井曾太郎・寺田寅彦等がおり、錚錚たる文豪芸術家を満足させた老舗温泉ホテルである。

いで湯よりあがり來りてわれひとり濡（ぬ）れしタオルを釘（くぎ）にかけたり

（「四　上高地」『白桃』昭和八年十月）

そして、杜夫は茂吉の知人与曾井湧司の子、豊に上高地の案内を依頼している。畢竟、茂吉にとって信州は熟知していたところ、という心づもりがあったと言えよう。茂吉が一転し杜夫の松本高校進学を承認していった誘因の一つになっていたと思われる。参考までに茂吉が信州を訪れた主なところを列挙する。

大正十年八月　長野県富士見に滞在静養す。
大正十四年五月　木曽福島に旅行。赤彦と行をともにする。
同年十一月　信州上田で講演し帰京。
昭和二年八月　信州各地に講演旅行をする。
昭和三年六月　信州へ行く。
昭和四年秋　信州各地講演行脚。
昭和五年五月　長野県講演旅行。
昭和六年八月　長野県大町大沢寺「アララギ」安居会に参会。
昭和八年九月　妻輝子と信州に行楽。
昭和十三年五月　信州上諏訪に行く。[34]

三、文学開眼から詠草へ

1　昭和二十年の出来事

昭和二十年の終戦の年、杜夫は信州松本で父茂吉の短歌と出会い、文学に覚醒していくこととなる。これまでその間の経過については、あまり具体的に取り沙汰されることはなかった。杜夫については、辻邦生との書簡や対談、『楡家の人びと』のトーマス・マンをはじめとした西洋文学との影響が比較的多く語られてきた面もあると思われる。確かに西洋近代文学やトーマス・マンらとの出会いは杜夫の重要な要素ではある。しかし、晩年『寂光』が上梓され、『母の影』[35]に父茂吉について繰り返し表現されるようになり、徐々に杜夫と茂吉との関係が明らかになってきている。

『母の影』の「神河内」と「茶がら」には繰り返し当時を追憶し、文学に覚醒していく姿を自ら語っている記述がある。二篇は杜夫が上高地を初めて訪れたときのこと、母が戦時中「茶がら」まで食べさせた思い出等が描かれており、茂吉短歌との出会いが、時間的に前後しながら反復して語られている。注目しておきたい。

ここでは、まず昭和二十年の空襲時から茂吉短歌との出会い、父茂吉への意識の変遷、文学開眼、そして詠草体験に至るまでについて、二篇を時系列で辿り、関連する叙述を抽出整理しておく。その後に杜夫が文学開眼に至るまでの茂吉短歌との出会いを更に詳しく見ていくこととする。（以下の傍点引用者）

（1）6月9日（土）の日記

杜夫は宇田家で二冊のノートを貰い、「齋藤宗吉昆虫記」「憂行日記　新篇1」を書き始めるが、「6月9日（土）」の日記に以下のように記している。

○「6月9日（土）午前中くだらぬ本を読みて過す。親父の歌集を見たきも無し。『小歌論』を少し読んだが割に面白い。『寒雲』を得、少しづつ読むつもりだ。」（「茶がら」P.91）

その後、日記にはその三倍ほどの文字数でハルゼミ、オトシブミの生態について記述している。このことから、未だこの時点では茂吉に対してはこれまでと同様に、雷親父、煙ったい存在という捉えであったと理解できよう。

（2）『寒雲』との出会い

○「それまでどちらかというと理科少年であったのに、その歌の幾何かにいたく感動した。松本へ行くときその歌集を貰って行き、ずっと読んでいた。」（「神河内」P.13）

○「父の「寒雲」を、兄嫁の父上から貰って私は旅立ったのであった。このことは、思いがけず私の人生を大きく変えることになったのだ。」（「茶がら」P.93）

○「茂吉中期のこの歌集の中に「木芽」という連作がある。あまりにも印象深く胸に刻み込まれたもの（後略）」（「茶がら」P.93）

○「どうして私があれほど感動したかは未だに分らない。」（「茶がら」P.94）

（3）『朝の螢』との出会い

○「そのうち（「松本へ行ってから」引用者記）苦労をして「赤光」「あらたま」からの自選歌集「朝の蛍」を入手した。これらの初期の歌は、ずっと圧倒的な感動を私に引起した。青年期の感傷的、抒情的な歌どもであり、更に私の記憶に懐しい青山墓地や私がそこで育って嫌だった狂院のことなどが詠みこまれていたからでもあろう。私は暗記するまでそれらの歌を繰返し読み、私自

身のとりとめない、だが切迫した感傷にひたった。そして、むかしから単にこわいと思っていた父は、突如として茂吉という崇拝するに足る歌人の姿として、私の内部で変貌したのである。あの頃の私の異常ともいえる感傷癖は、やはり死が身近に迫っていることからもたらされたものもあったかも知れない。父の歌の中でも、とにかく「さびし」くて「悲し」ければ私の嗜好にぴったりするのであった。」（「神河内」P.14）

○「むさぼるように繰返し暗唱するまで読みふけった。父の若い頃の歌であるから、ようやく青年期に近づいていた私には、もっと分かり易かったし、懐しい青山墓地のことや、そこで生れて損をしたと思っていた狂院のことなどがかなり歌われていたからである。（中略）このような若き日の父の感傷的な歌は、私の嗜好にまさしくぴったりするような気がした。（中略）父の歌にはこうした思い出につながるものがあったから、私はいっそう惹きつけられたのだと思う。ちょうど精神的思春期にあった私は、寮で馬鹿騒ぎをやる半面、一人きりで川原の土手に寝そべっているときなど、孤独そのものであった。こう書くのは恥ずかしいことだが、私の文学開眼の初まりは、別にトーマス・マンではなくして、幼い頃からおっかなく煙ったく思っていた父の歌によってもたらされたのであった。」

（「茶がら」PP.97～98）

（4）山形県金瓶村へ

○「七月の初め、私は山形県の金瓶村に疎開していた父のもとへ行った。焼け出された母と妹もその家に厄介になっていた。農家であるから、毎食、当時は滅多にお目にかかれない白米の飯である。しかし一面気弱なところのある父は私まで世話になるという気がねから、三杯以上は決して食べるなと厳命した。（中略）「居候三杯目にはそっと出し」という川柳はなるほど名作だなと、そのときは露ほどのユーモア感覚もなく思ったものだ。」

（「神河内」PP.11～12）

○「七月初旬、寮は食糧難から閉鎖されることになってしまった。すでに自宅のない私は、父の疎開先である山形県金瓶村へ行くことになった。一種つつましい、おののくような気持である。こんな雷親父を持って、損をしたとずっと思いこんでいた私にとって、父はすでに崇拝すべき偉大な歌人に変身していたからだ。ところが、いざ父の実妹の嫁いでいるその家に到着してみると、その茂吉という男は、相変らずガミガミと母を叱りつけたり、跋扈する蚤に対して憤慨ばかりしていた。」

（「茶がら」P.99）

ここでは「十日たらず」を家族とともに過す。「茶がら」では「土蔵の中」の生活や「白米」や「笹巻」の思い出の後、母が団欒に加わることもなく席を立ってしまった思い出などが記される。その後、父の歌集を手にとる場面が描かれる。

○「私は金瓶で、父が散歩に出た隙に、ひそかに「赤光」や「あらたま」の歌集を取りだし、「朝の蛍」に載っていない歌をノートにびっしりと筆写した。」

（「茶がら」P.101）

しかし、一篇には具体的な茂吉の歌は紹介されていない。また笹巻きをたくさん出してもらった時は松田の婆や（齋藤家の女中、松田やを）のことを思い出し、杜夫は「私は感激のあまり、笹巻について何首かつたない短歌を作ったほどであった」（「茶がら」P.100、『寂光』「昭和二十年」の冒頭に六首収録）と回想している。茂吉が、食事の時は「三杯以上、決して食べるな」と命じたこと

もあって、「茂吉という男は、遠く離れて、歌集を読んだほうがよほど憧れの的になるのだが、さて、その実物のそばで暮らしてみると、どうも厄介な存在のようであった」（「茶がら」P.100）にとどめている。

（5）一旦東京へ、その後松本へ

○「山形にいたのは十日足らずに過ぎなかった。七月十三日に東京で軍隊の点呼を受けるため上京し、親類の家に世話になり、二十日に松本へ帰った。」（「神河内」P.12）

○「上級学校の正式入学式は、八月一日と定められていた。私がひとまず東京へ帰る（中略）東京では、姉百子の嫁いでいる義兄の家に世話になった（中略）松本へ行く時はかなり苦労しなければならなかった（後略）」（「茶がら」PP.101 ～ 102）

（6）上高地へ

○「八月一日の入学式―校庭で訓辞を受け、そのまま大町の軍需工場へ直行するだけだったが―の前に、一目憧れていた上高地を訪れようと、与曾井さんの世話で、私は豊君と島々宿の貧相な宿に泊まることになったのである。」（「神河内」P.12）

○「それにしても、中学末期の工場時代に、やはり甘美な藤村や白秋の詩をようやくにして読み出していた私は、霹靂ともいえる唐突な文学開眼から、自分でも幼稚な短歌を作りだしていたのである。」（「神河内 P.14」）

○「私は、少し早目に松本に着き、先に「神河内」に書いたように、憧れの上高地を訪れることができた。」（「茶がら」P.103）

（7）詠草体験1（上高地）

○「私はなお寝つかれず、灯をつけて小さな手帳に何首かの歌を書きつけた。」

梓川の水音聞きつつ垢じみし畳のうへに黙してゐたり

終電車の出で行く音を聞きながら目ざめてゐたりくらやみの中

闇なればはかなきもののせまりきて寝ねがてなくにまなこをつぶる（「神河内」PP.14 ～ 15）

○「その夕方（「上高地二日目」引用者記）、私は一人で宿近くの落葉松林の中の細道を足の向くままにほっつき、細い梓川の支流が音を立てている箇所に来ると、そのわきにしゃがみこんで水の流れを見つめ、三十分も沈思してからまた歩んだ（中略）そんなひそかな歩みをつづけていると、私の心は上高地にきた歓びよりも、島々の宿の暗黒の中で覚えたような言いようのない孤独感、泣きたくなるような感傷に浸されてくるのだった。私は小さな手帳を開き、また稚拙な短歌を幾つか書き付けた。

一人きてただ眺め入る川水は悲しきまでに早く流るる

現身のわれの眺める川水は悲しきまでに透きとほりゐる

梓川の音のみ高くこの峡は恐ろしきまで静まりにけり

このときの私にとっては、「悲し」という直接的な表現がどうしてもぴったりしたのであった。少しの誇張もなかった。」（「神河内 P.22」）

（8）詠草体験2（大町の昭和電工工場寮）

○「それが敗戦を告げる詔勅であることが、ようやくにして分った。急に涙がとめどもなく溢れ、頬を伝って滴りおちた……（中略）閑散として人気の稀になった寮の部屋で、私は次のような稚拙な歌を作った。」

星空のいつくしきかもおのづから涙あふれつ国破れたり（「茶がら」P.104）

杜夫と茂吉短歌との出会いについては、杜夫のこれまでの著作を手がかりに概観すると、昭和二十年の三度の稀有な出会いの場面を指摘することができる。一度目は、五月の空襲で青山の家が焼けて数日後、小金井の兄嫁の実家で初めて父の歌集を読み感動し、それを貰って松本へ持って行った『寒雲』との出会い。二度目は、松本へ行ってから、自ら苦労して手に入れ、むさぼり読んだという茂吉の自選歌集『朝の螢』との出会い。そして三度目は、七月に食糧難から寮が閉鎖となり、山形の金瓶に疎開中の父を訪ね、そこで茂吉が散歩にでた隙に、大学ノートにびっしりと筆写した『朝の蛍』にはない『赤光』『あらたま』の歌との出会いである。これら三度の場面は単なる断片的な出来事ではなく、杜夫が茂吉の短歌から徐々に文学に覚醒していく、極めて有機的で連関している場面であると捉えることが妥当であると考える。

2　『寒雲』との出会い

杜夫は昭和二十年六月当時心を惹かれた『寒雲』[36]の連作「木芽」を「茶がら」には以下のように全作引用している。

もろもろの木芽ふきいづる山の上にわれは來りぬ寝ねむと思ひて
夜をこめて曇りのしづむ山かひに木芽はいまだととのはなくに
山なかに雉子が啼きて行春の曇のふるふ晝つ方あはれ
花の咲く馬酔木のかげに吾が居れば山の獣やすらふごとし
みづうみを甲へる山の青だちて空のひと隅よ光さしたり
こよひあやしくも自らの掌を見るみまかりゆきし父に似たりや
のぼり來し山の一夜のまなかひにまぼろし見つつ吾は眠らむ
とほき彼方の壁の上にはくれなゐの衣を著たるマリア・マグダレナ
北平の城壁くぐりながながと駱駝の連はあゆみそめ居り
涙いでてシンガポールの日本墓地よぎりて行きしこともおもほゆ
山襞のうねれる見ればこの朝明ほのけきがごと青みそむるなり
こころ虚しく見むとし思へや山の上の湖にしきりに曇をおくる
行春の雨のそそげる山なかにためらふ間なく葉はうごきけり
山こへて雨ふりくれば目のまへの若かへるでのゆるるこの夜

それまで昆虫マニアの理科少年、非文学少年であったと自らを振り返る杜夫が、空襲という生死の瀬戸際をくぐりぬけ、初夏の日ざしに輝く北アルプスの残雪を望み、信州松本に一人来た時、「どうして「木芽」の連作を或る程度理解し、感動したのか、今になって考えてみてもどうしても分らない」[37]と自らを内省する。一方で、「とにかく、箱根の晩春に詠まれたこの連作は、父の過去の追憶も入りまじり、一種の心境小説のようだとも私には思えたのである」[38]と記している。

茂吉にとって『寒雲』は、昭和十二年から昭和十四年九月までの作品（五十六歳から五十八歳まで）計千百十五首を収めたものであり、五十代壮年期の後半の歌である。高野公彦は『寒雲』当時の作品の特徴を「どこか不分明な部分を秘めながら、悲傷性を帯びた力強い韻律によって私たちを惹きつける歌が多い」[39]と指摘し、当時の茂吉の二人の女性との苦悩を象徴的に「二本の緋色の糸」

とし、妻輝子の銀座ダンスホール事件（昭和八年）と昭和九年九月の子規三十三回忌歌会で出会った永井ふさ子（アララギ会員）との恋情と苦悩について述べている。輝子については茂吉の『白桃』「後記」に茂吉が自ら記す「精神的負傷が作品にも反映してゐると思ふ」を挙げながら、その傷心孤独の茂吉が二十七歳年下の美しい女性、永井ふさ子に心を寄せていくことになったとし、茂吉の屈折した悲嘆の中から作品が詠まれていったことを指摘している。

ふさ子宛の書簡は昭和九年の三通から始まり、十年四通、十一年四十三通、十二年五十四通、十三年九通、十四年以降（昭和二十年まで）十七通、計百三十通にも及ぶ[40]。それはまさに『寒雲』詠草の時期と重なってくる。ふさ子の著書には、『寒雲』の題名は茂吉がふさ子の秀作短歌の中から選定したことが明かされている。

更に茂吉自身は「木芽」十四首について「作歌四十年」[41]の自注に次のように述べている。

この十四首に、『連作』としてこだわつてあるのは、一首一首の味ひは無論味つてもらひたいが、十四首全體として世界を一纏めにしても味つてもらひたいといふ意味であった。この連作のことは、正岡子規が實行し、伊藤左千夫が立論して以來、連作といふ概念に幾變遷かを閲してゐる。その變遷の一つの役割をしたのがこの十四首であつて、この種類の連作をも連作として許容しても好からうといふのがこの連作の特徴であつた。そして此連作は、左千夫のいふ植込趣味でもなく、空間的にも時間的にも嚴格な統一あるのでもなく、また曙覽の鑛山の歌のやうな逐次的描寫でもなく、獨樂吟のやうな一題數十首といふものでもなく、一讀ばらばらのやうであつて、一つの情調（氣分、シユチンムンク）によつて聯絡がありつながりを持つて十四首をしまひまで讀ませて行くといふやり方である。それだから、まだ暗い山を曉の雲霧と云つたかと思へば、馬酔木の花を見て山の獸を聯想し、さうかとおもふと亡父の掌をおもひ、伊太利パヅアのジオツトウの壁畫をおもひ、シンガポールの日本人墓地のことなどを咏んで居る。かういふ連作の爲方は子規系統のものにもこれまで無かつたので、自分はこの一聯の出來た時には心の滿足をおぼえたことを想起し得る。作歌に熱中してゐても、滿足を覺えるなどといふことは殆ど無いものだから、この一聯を記念として殘して置くつもりである。（傍点引用者）

この茂吉の自注に対して、杜夫は、「もちろん、私はこの文章を読んだわけではなかった」[42]と記し、茂吉の作歌の心境を知らずに当時直感で「木芽」に惹かれたことを明記している。東京大空襲で思い出の多い家を、大切な標本を、そして友を失った杜夫が極限情況とも言える喪失感と深い精神的悲傷を負って松本を訪れる際、「木芽」と出会った。そして「一種の心境小説」として父茂吉の「悲傷性を帯びた力強い韻律」に深く感動し、かつての少年時代の暮らしを思い出した。すると、少年時代に「恐ろしく煙たかった父」[43]の印象は一気に逆転し、尊敬するようになっていった。杜夫にとって『寒雲』は父茂吉への大きな意識変化に繋がっていく最初の歌集であったと思われる。『茂吉彷徨』には「木芽」以外の『寒雲』の作品についての具体的な杜夫の思い出が語られている。二首を提示する。

○過ぎらむとするのか否か不明にて歩道に来たる黒猫ひとつ

私が子供の頃、家には飼猫が一匹いたらしい（中略）外には野良猫が沢山いた。茂吉は好奇心が強いから、マタタビの漬物

を買ってきて、玄関に集まった三、四匹の猫にそれを与えて観察した。猫たちは目をほそめ、或いは体を仰向けて横転したりする。そのさまをいかにも面白そうに茂吉は五分以上も見守っていて、ときに「ほう、ほう」と嘆声をあげたものだ。

○寒口陥ちてとどろきし日に山西の小さき村に戦死をしたり

山口隆一。私が小学校に入る頃書生をしていた。真面目な人で、百から数を引く問題を十ばかり作り、ストップ・ウォッチを持って姉百子と私に競争してやらせた。国学院大学高等師範学校を卒業したあと、山形県金瓶村宝泉寺住職、上山国民学校（実科中学）教諭をしていたが、日中戦争のときに招集、北支各地を転戦、山西省絳県薫封村の戦いで戦死をした。

また、杜夫が監修した「齋藤茂吉秀歌」[44]には「木芽」以外に次の五首も採り上げられている。特に二首目については、小冊子「手引き」に「昭和十年代の流行歌。天井裏の鼠の巣をとりのぞく職人がはな歌に歌ったもの」と書き加えていることから、杜夫にとってはささやかな出来事が故に貴重な過去の日常を想起する一首であったと推察される。

○冬がれし木立の中はものも居ず幽けくもあるか落葉うごく音

○鼠の巣片づけながらいふこゑは「ああそれなのにそれなのにねえ」

○年まねくわれの戀ひにし鴨山を夢かとぞ思ふあひ對ひつる

○わが側にをとめ來たりてドラ焼をしみじみ食ひて去りたるかなや

○むらさきの葡萄のたねはとほき世のアナクレオン[45]の咽を塞ぎき

3　『朝の螢』との出会い

（1）杜夫にとっての『朝の螢』

杜夫は『寂光』の「はしがき」に「木芽」の連作との感動的な出会いを述懐した後、更に『朝の螢』[46]との出会いを以下のように述べている。

松本へ行ってずいぶん経ってから、苦労して茂吉の自選歌集『朝の螢』を入手し、むさぼり読んだ。このほうが、衝撃は更に強かった。つまり、私がそこで生れて嫌だった狂院や、子供の頃遊んだ青山墓地の歌などがあったからである。ほどもなく、私は茂吉愛好家、いや崇拝者となっていた。（傍点引用者）

『寒雲』で悲傷性を帯びた茂吉短歌の韻律に深く感動した杜夫は、茂吉の短歌に惹かれるあまり、ついに自ら『朝の螢』を手に入れるのである。杜夫が『朝の螢』に、より一層熱を入れていかざるを得なかったのはなぜであろうか。そして、杜夫にとって「このほうが、衝撃は更に強かった」という『朝の螢』とは、どのような歌集であろうか。

「茶がら」には「『朝の螢』を得、むさぼるように繰返し暗唱するまで読みふけった。父の若い頃の歌であるから、ようやく青年期に近づいていた私には、もっと分かり易かった」と述べ、当時読み親しんだ十五首を列挙している。作品上部の番号は「茶がら」の掲載順に引用者付記。（作年・茂吉年齢・題名（詞書）・歌集名の順で明記する）

1かの岡に癲癇院のたちたるは邪宗来より悲しかるらむ

（明治四十五年大正元年作　三十一歳「柿乃村人へ」『赤光』）

2よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふるよ若葉かへるで

（明治四十四年作　三十歳「うつし身」『赤光』、明治四十四年作

「うつし身」『朝の螢』）

3水のべの花の小花の散りどころ盲目となりて抱かれて呉れよ

（明治四十五年大正元年作　三十一歳「或る夜」『赤光』）

4ゆふ日とほく金にひかれば群童は眼つむりて斜面をころがりにけり

（明治四十五年大正元年作　三十一歳「青山の鐵砲山」『赤光』）

5現身のわが血脈のやや細り墓地にしんしんと雪つもる見ゆ

（明治四十五年大正元年作　三十一歳「雪ふる日」『赤光』、大正元年作　大正二年作「折々の歌」『朝の螢』）

6雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔の心かなしかれども

（大正二年作　三十二歳「さんげの心」『赤光』、大正元年作　大正二年作「折々の歌」『朝の螢』）

7あはれなる女の瞼恋ひ撫でてその夜ほとほとわれは死にけり

（大正二年作　三十二歳「おひろ其の三」『赤光』）

8ひんがしに星いづる時汝が見なばその目ほのぼのとかなしくあれよ

（大正二年作　三十二歳「おひろ其の三」『赤光』）

9愁ひつつ去にし子ゆゑに藤のはな揺る光さへかなしきものを

（大正二年作　三十二歳「おひろ其の二」『赤光』、大正二年作「相聞」『朝の螢』）

10なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星さへあかからなくに

（大正二年作　三十二歳「おひろ其の一」『赤光』、大正二年作「相聞」『朝の螢』）

11わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

（大正二年作　三十二歳「死にたまふ母其の三」『赤光』、大正二年作「死にたまふ母」『朝の螢』）

12楢わか葉照りひるがへるうつつなに山蚕は青く生れぬ山蚕は

（大正二年作　三十二歳「死にたまふ母其の三」『赤光』、大正二年作「死にたまふ母」『朝の螢』）

13桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり

（大正二年作　三十二歳「死にたまふ母其の二」『赤光』、大正二年作「死にたまふ母」『朝の螢』）

14めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり

（大正二年作　三十二歳「七月二十三日」『赤光』、大正二年作「折にふれ」「七月二十三日四首」『朝の螢』）

15ひた走るわが道暗ししんしんと悚へかねたるわが道くらし

（大正二年作　三十二歳「悲報來」『赤光』、大正二年作「折にふれ」『朝の螢』）

『朝の螢』は茂吉の処女歌集『赤光』、第二歌集『あらたま』からの自選歌集であり、「地獄極樂圖」（明治三十九年作）に始まり、「箱根・長崎」（大正六年作）で終わっている。作品の掲載は『赤光』『あらたま』の作品名が生かされ、すべて年代順に整備されている。『赤光』（東雲堂書店、大正二年十月十五日）が大正二年の「1悲報來」から始まり、時間を遡るように構成されているのに対して、『朝の螢』は総て時系列に従っているところがその特徴である。

杜夫が「茶がら」に列挙した十五首は総て『赤光』からの作品であり、内五首（1・3・4・7・8）は『赤光』のみの掲載歌であることがわかる。いずれも三十一歳から三十二歳の茂吉の初期の作品であることが確認できる。

『朝の螢』には「瘋癲院」「墓地」等の他にも杜夫に少年時代を思い出させたであろう多くの語句が使用されている。一例を挙げ

ると、「冬來集大正四年雑歌」には「狂人に親しみて」「淺茅が原」「狂人もりは蚊帳を吊るなり」等、「淺茅集大正五年雑歌」には「三宅坂」「浅草のくらき小路」「草の光に鳴く蛙」「命みじかし靑がへるのこゑ」「蟻地獄こもるも寂し」「癲癲學」「狂院」「蜩は一とき鳴けり」「うらがなしき朝蟬のこゑ」等、当時の杜夫にとって懐かしい地名や生き物、茂吉の人となりまでも思い出し、東京での生活を彷彿とさせたであろう語句を見出すことができる。

（2）茂吉にとっての『朝の螢』

一方、茂吉にとって『朝の螢』はどのような経緯で編まれた歌集であろうか。当時の茂吉の心境はその「巻末の小記」に詳しい。まずは題名に目を向けてみるとする。茂吉は「歌集に「朝の螢」と名づけたのはゆゑあるのではない。私の歌、草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ、に本づいている。歌は大正三年の制作に係つてゐる。この歌は舊作であるけれどもなにがなし此の歌を私はあはれに思ふ」と述べるように、題名は次の茂吉作品から採られている。

草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ

（『あらたま』所収、大正三年作）

この一首、「螢よ」の「よ」を「呼びかけ」ととるか、「詠嘆」ととるかによって多少の意味の違いが発生してこようが、茂吉本人は「作家四十年」の中で、「ああ朝の螢よ、汝とても短い運命の持ち主であろうが、私もまた所詮短命者の列からのがれたいものである。されば汝と相見るこの私の命をさしあたって死なしめてはならぬ（活かしてほしい）、といふぐらいの歌である」と記している。茂吉の意図を尊重し、ここでは次のように解釈をしておきたい。

草づたいに歩んでいく朝、草の上に蛍を見つけた。夜の光とは違って何処かはかなく感じる。その短くはかない命は私も同じ。その命を死なせることなく、生かしてほしいものだ、朝の蛍よ。「単に螢によびかけているのではなく、自己をもふくめて絶対的な何ものかへのすがるような気持ち」[47]とも読みとれ、生きとし生きるもののはかない命への共感と、生きることへの強い願望が感じられてくる。反面、歌の背後には、現実の生命への強い不安や死への恐怖さえもうかがえる一首である。

茂吉にとって本歌集は「はじめての自選集」であり、「選ぶという容易なるが如くであつて實はむづかしい」が、「比較的容易に選び了へた」と「巻末の小記」に記し、自選当時の心境を更に以下のように記している。

（前略）私は數年歐羅巴に留學して、その間自分の歌に親しむ機會をなくしてゐた。さて歸國して久しぶりにて自分の歌を讀んでみると、それは私には盡く一種の疎き響きをもつてゐた。すなはち自分のものではないやうな氣がした。玆に於て私は、歌集「朝の螢」を比較的容易にそして一來呵成に選び得たのではなからうか。

○

かくの如き狀態で私は歌集「朝の螢」を選んだ。加ふるに私は、歸國以來こころに深い痛手を負つてその創痍がいまだに癒ゆるいとまがない。私は秘かに思ふ。歌集「朝の螢」は如是のこころの狀態と不可離不可斷の關聯に立つてゐるのではあるまいか。それならば、願はくはすみやかに私に平安のこころの狀態を與へたまへ。そのこころの狀態にゐて、私はもう一つの自選歌集を選びうるであらう。かくの如くにして

私は、二とほり、三とほりの自選歌集をつくり得るであろう。けれども、歌集「朝の螢」は私のこころの悲しく痛ましき時につくり得たものである。縁ありて、この歌集を讀む友よ、ねがはくは如是のゆゑよしを忘れたまふな。（傍点引用者）[48]

と記し、大正元年から「約六年間の歌を私はこの選集に収めたに過ぎないけれども、おほよそ私の歌風の特徴をうかがふことが出来るとおもふ」とし、六年の「道にはいろいろの曲折があった」と振り返っている。「年譜」を参考に茂吉の六年間の主な出来事を次に列記しておく。

大正元年―「アララギ」の動向をめぐって伊藤左千夫との間に作歌観上の対立を生じ、一時雑誌刊行の危機に直面することもあった。十一月学会で「麻痺性痴呆とワッセルマン反応」の研究報告。東京帝国大医科大学助手となる。（31歳）

大正二年―齋藤てる子、学習院女子部卒業。五月十六日母いく危篤の報に接し帰郷、同二十三日死去、享年五十九歳。七月三十日伊藤左千夫死去。第一歌集『赤光』をアララギ叢書第二編として刊行。（32歳）

大正三年―四月、齋藤紀一次女てる子と結婚。同月島木赤彦が信州より上京、小石川区のいろは館にて止宿し、雑誌刊行の協力体制をとった。六月アララギ編集発行人となる。七月、第一次世界大戦勃発のため留学予定の延期やむなきに至った。（33歳）

大正四年―二月八日、長塚節、九州帝国大学付属病院で死去。同月よりアララギ発行人が久保田俊彦（島木赤彦）となり、発行所を小石川区に移す。十一月十三日、祖母ひで死去（八十一歳）葬儀に列す。（34歳）

大正五年―アララギ一月より三月まで、土岐哀果（善麿）との論争文を掲載した。三月二十一日長男茂太生まる。七月、郷里に父の病気を見舞う。十月、中村憲吉郷里（広島県双三郡）に帰住。（35歳）

大正六年―東京帝国大医科大学助手、および附属病院勤務を依願退職、ついで東京府巣鴨病院医員嘱託を解かれた。四月、山形から立候補した齋藤紀一、衆議院総選挙に当選。十月十日から二十六日まで箱根五段温泉に滞在す。帰京直後、呉秀三より長崎医学専門学校赴任の交渉あり承諾。十二月同医専教授に任ぜられ、十七日赴任。二十二日、県立長崎病院精神科部長となる。（36歳）

また「六年の曲折」に付け加えて、一年前の明治四十四年（茂吉三十歳）は一年ずれるが、七月頃から巣鴨病院へ通い始め、そのころ、自宅病院で患者が自殺するという痛ましい出来事があった。また「巣鴨病院に勤務していた時も受け持ちの幾たりか自殺者をだした」[49]。患者が精神の病によって自ら命を絶つことを体験したときの悲傷の念は精神科の医師ならではの辛い体験であり、なかなか癒されるものではなかったと想像する。当時の作品は「黄涙余録」と題された一連の作品にまとめられた。

こうして「年譜」をみても、つぎつぎと身辺に悲傷事が相次いだ時期であり、医者としての立場も大きく変化し、住居を移る等、生活の様相が著しく変化していったと理解できる。また、アララギの発行人も伊藤左千夫、古泉千樫、茂吉、島木赤彦と目まぐるしく交替していったまさに怒濤のような時期であったと考えられ

る。

そして、この六年間の作品を『赤光』『あらたま』から自選するときの茂吉の心境もまた、想像を絶するような心に深い痛手を負った時期である。先の「巻末の小記」に茂吉が、「その創痍がいまだに癒ゆるいとまがない」という情況に配慮したい。

『朝の螢』が初めて刊行された年、大正十四年一月は茂吉が留学から帰国した年であった。茂吉は大正十年十月、精神病学研究のため欧州留学に出発し、十二月二十日ベルリンに到着した。以来大正十一年にはウィーン大学神経学研究所に入り、十一月論文「植物中枢神経のホルモンによる昂奮性について」を完成させた。更に、大正十二年には学位論文「麻痺性痴呆者の脳図」を完成させ、七月、ミュンヘン大学に転学となった。七月二十七日、実父守谷伝右衛門病没、九月関東大震災の報せを受けた。そして、大正十三年五月には論文「家兎の大脳皮質における壊死、軟化及組織化に就ての実験的研究」を完成させ、十月、医学博士の学位を得て帰国の途に就いた。

ところが、十二月、船上で青山脳病院全焼の電報を受けとることとなるのである。十二月二十九日未明に出た火は、瞬く間に病院を包み、鍵がかけられた病棟を中心に十九名の死者を出す大惨事であった。年が明け東京に帰った茂吉は、焼跡を前に、途方にくれる間もなく、養父紀一とともに病院再建の重荷を負うこととなっていった。この年の終わり、茂吉は日記に「今年ハ実ニ悲シイ年デアツタ。苦艱ノ年デアツタ」と記している。

「I「赤光」時代」によると、茂吉は留学時の食事などを節約しながら「医学、美術、哲学、文学の本を多量に買」い、その大部分は日本に送ってあったが、火災によりすべて灰燼に帰してしまった。「傷心のまま、茂吉はそれらを焼跡から掘り天日で乾かした」という。

そのような時期に『朝の螢』は自選され出版されていったのである。まさに、艱難辛苦の人生の悲嘆を抱きながら、悲傷事が続いた怒濤のような六年間の作品を再びたどり、『朝の螢』の掲載作品が選ばれていったことを思うに、厳しい人生と向かい合い必死に生きていこうとする壮絶な茂吉の命が浮かんでくる。

（3）悲傷から係恋へ

精神的思春期を迎えていた杜夫は、先の父茂吉の姿が投影された『朝の螢』と、松本で出会っていったが、その頃軍国青年であった杜夫は極度の喪失感を抱きつつ、徐々に戦局が怪しくなっていく中、明日をも知れず、やがて一億玉砕となったときは死をも覚悟していた。加えて、青年期特有の純真性から感傷的な「死への親近感」（『幽霊』）を抱いていたとも推察できる。東京大空襲を生き延びてきた杜夫の当時の様子は『楡家の人びと』に描かれ、更にその心境は『ダフニスとクロエー』[50]を素材として描かれた『神々の消えた土地』[51]にと結実している。

野島秀勝はその「解説―現代に牧歌は可能か」において、本牧歌的恋物語が「焼夷弾の雨が降り一切が焼きつくされ、死が日常であった戦争末期に物語の時が設定されていることを失念してはなるまい」とし以下のように述べている。

「恐ろしい戦争の中にのみこそ、牧歌的なナイーヴな恋が生じるのではあるまいか」、この主人公の感慨はそのまま作者自身のものであるだろう。戦争と牧歌、これは逆説ではない。軍国少年だった者の追憶の美化などではさらさらない。ただ、

さし迫った死の影がないところ、生の刹那の煌めきもないという、是非もない人間の事実があるばかりだ。

一編の主人公則雄（＝ダフニス）は珍種の蝶のような少女知子（＝クロエー）に憧憬を抱き、あたかも神話の世界を追体験するように描かれていく。空襲によって何もかもが失われるという過酷な現実に立たされていた杜夫は、失われた人間の魂（精神・故郷）を取り戻そうと真剣に現実と向き合い煩悶しながら、いかに生きるかを自らに問いかけていたのであろう。

先に、「螢」の短い命への茂吉の共感と生きることへの強い願望を指摘したが、それに杜夫が同調するような叙述を『神々の消えた土地』に見出すことができる。その第「11」章後半、則雄は知子からダフニスとクロエーのような牧歌的な恋をしたいと打ち明けられる手紙を受け取り、「一億玉砕」の念にしばられながら知子との松本での再会を指折り待ち望んでいた時期に、父からの手紙を受け取るが、その手紙の内容と則雄の享受に注目してみたい。

（前略）お前の年頃なら、親元から遠く離れて暮していれば、おそらく感傷的な気持にもなることでしょう。そのときは大自然のことを考えてください。もともと人間は、大自然から産れたものですから。そして、お前もイワツバメもキバナノコマノツメも同じ細胞からできているものなのです（中略）そろそろいろんな本を読むべき時期だということを忘れないでください。父より」（中略）人間である私の細胞が鳥や花の細胞と同じであることを、それまで私は知らなかったのだ。さすが大学の助教授だけのことはあるなと、そのとき初めて、私は父のことを尊敬する気になったのである。そして、そのことを幸福だと思った（中略）大自然とこの自分とが一体のものだと思うと、どんな不条理なことが今後起ころうとも、自分は生きてゆこうという意志が、おのずから私の体内にこみあげてくるようであった。それは、万一、敵の本土上陸が始まったなら、地雷を抱いて蛸壺にもぐり、おのが死と共に敵の戦車一台を道づれにしてやることがもっともいさぎよいと考えていた、かつての私とはまったく異なった思念であった。（傍点引用者）

この則雄の「大自然とこの自分とが一体のものだ」という認識は、まさしく『朝の螢』の「螢」の一首に込められた茂吉の思いと一脈通ずるものがあり、杜夫が生きることへの意志を抱いていく姿と重ねて受けとめることができる。一面が焼け野原となってしまった故郷東京とはかけ離れた松本の地、信州の山や昆虫など自然の姿に深い命の共感、更には一体感をも抱き、牧歌的な精神の理想郷を見出そうとしていった杜夫であったと当時の情況を察することができる。

ところで、杜夫の『神々の消えた土地』の初出は「新潮」（平成四年六月号）であったが、草稿は既に『幽霊』を書き出す前、「私が大学二年二十三歳のとき、創作ノートに半分書いておいたものである」[52]と杜夫が記すようにごく初期の段階で構想が練られていたと考えられる。おそらくは松本高校入学当時の記憶を忘れぬうちに残しておきたいという思いもあったであろう。本文中に明らかに茂吉の影響が見られる箇所がある。則雄は五月二十五日夜の大空襲で自宅が全焼した後、父の友人栗崎さん（実際の杜夫は宇田家）の家に二週間ほど世話になった後、入寮許可の証明書が成就し、信州に旅立つ日となる。新宿から甲府、そして八ヶ岳を望み、諏訪湖を眺め塩尻を過ぎる場面である。

そして、塩尻を過ぎると、西の窓に忘れることのできぬ北アルプス連峰が遥かに連なっているのを、係恋の情を抱いて私は望見した。黒い谿間の彼方に聳える全身真白な乗鞍岳は、あたかもあえかな女神が裸体を露わしているかのようであった。

私は前回も、この雄大な光景に接したはずであった。だが、このときどうして、山々があのように壮麗に、そして、たそがれの忍び寄りだした空がかくも蒼みの極致として目に映じてきたのだろうか。おそらく焦土と化した無秩序の都会と、この大自然の言おうようのない調和とを、無意識に比較していたのではあるまいか。

私はふたたび、ヒマラヤ杉に囲まれた懐しい校門をくぐった。（傍点引用者）

この「女神の裸体」と杜夫に言わしめた残雪残る乗鞍岳は、戦争という死を意識せざるを得なかった情況の杜夫にとって「係恋」に象徴される憧れであり、クロエーのもう一つのヴァリエーション（変奏モチーフ）だったと考えることができる。ここに使われる「係恋」は茂吉が好んだ言葉の一つで、茂吉は歌にも文章にも使っている。以下に四例ほど挙げてみる。（番号引用者）

1係戀（けいれん）に似しこころもて樺太の原生林をただ空想せりき
（「眞岡」『石泉』昭和七年）

2たたかひにやぶれしのちにながらえてこの係戀（けいれん）は何に本づく（偶成）　（「春深し」『白き山』昭和二十一年）

3「（前略）この歌は、中心は、「潮干満ちい隠れゆかば思ほえむかも」にあり、赤人的に精淡の調であるが、なかに情感が漂っていて佳い歌である。海の玉藻に対する係恋とも云うべきもので、「思ほえむかも」は、多くは恋人とか旧都などに対して用いる言葉であるが、この歌では「玉藻」に云っている。（後略）」　（齋藤茂吉『万葉秀歌上巻』[53]）

4「（前略）煙草ははじめは書生に呉れてゐたが、時には火をつけてその煙を嗅ぐことがある。もともと煙の香に係戀を持つてゐたのだから中學の三年ごろから、秘かに煙草喫むことをおぼえて、一年ぐらゐ偶偶に喫んでゐたが、ある動機で禁煙して、第一高等学校の三年のときまた喫みはじめた。」　（「隨筆二、三筋町界隈」[54]）

「係戀」（「係恋」）は一般には「心にかけて恋い慕うこと」（広辞苑）の意であるが、そもそもは万葉集にみられる言葉で、森鷗外が小説『青年』に「係恋（あこがれ）」を使用しており、外国語の概念を表現する際に万葉の漢語を使用したところに始まりがあったと小島憲之が指摘している。（「漢語あそび―鷗外語「係恋」の場合」）「係恋」は鷗外の影響を受けた茂吉らが使用し、弟子の佐藤佐太郎、更には杜夫へと受け継がれていったとみることができる。

一例目は、昭和七年（茂吉五十一歳）夏、茂吉が山形に住む弟の高橋四郎兵衛と北海道を訪れた際の用例である。北海道には当時次兄の守谷富太郎がおり、二人は次兄に会うことを目的の一つにしていた。懐かしい兄との再会を果たした二人は、その後樺太へと渡った。一首にはその際眞岡にて樺太の原始林を見ることを心から楽しみにしていた茂吉の心情がよく表れている。

二例目は、昭和二十一年（茂吉六十五歳）から昭和二十二年にかけて、山形県大石田（聴禽書屋）に滞在中の作品を収めた『白き山』の最初の春の歌である。『白き山』は茂吉晩年の最も世評が高い歌集と言われるが、三月に肋膜炎に罹り、病臥中に詠んだ歌

である。一首は杜夫が「『白き山』の中でも私が好きなものである」[55]と記すように杜夫にとっても思い出深い作品である。本論一の「杜夫と茂吉の年代記」にも述べたように、杜夫は二月十八日から二十日まで聴禽書屋に行き、茂吉と生活を共にしていた。杜夫は実感をもってこの歌を読んだことであろう。この「係戀」に杜夫は「生への執着」[56]と注を入れている。

三例目は、茂吉が生涯をかけて取り組んだ『柿本人麿』をはじめとした万葉集の研究の評釈に使われた。赤人の一首の意は「沖の島の荒磯に生えている玉藻刈りもしたが、今に潮が満ちて来て荒磯が隠れてしまうなら、心残りがして、玉藻を恋しくおもうだろう」[57]と茂吉が述べるように、時間が経ってやがて消えてしまうであろう玉藻への恋い慕う情として使われている。

四例目の「三筋町」は、東京台東区の南部に位置しており、昭和十六年に「浅草三筋町」となった地名で、茂吉が十五歳で上京した時（明治二十九年）、義父紀一の浅草医院があった場所である。茂吉は紀一のもとに寄寓し、開成尋常中学校に編入学した。「三筋町界隈」は雑誌「文藝春秋」（昭和十二年一月号）に載った小編で、茂吉の日記によれば、昭和十一年十一月二十三日から二十六日にかけての執筆であった（茂吉五十五歳）。大好きであった煙草を吸うようになった中学校の頃の懐かしい思い出として、煙草の煙に「係戀」を抱いていた昔の自分を回想しているのである。

「係戀」の対象は、「まだ見ぬ樺太の原始林」「自分の未来の命」「かつての玉藻」「喫んでみたいと思っていた煙草の煙」いずれも共通している点は、対象への恋い慕う言い尽くせない思い（あこがれ）であると捉えることができる。

後年、杜夫は平成四年五月二十七日の対談で「係恋なんて言葉を親父の歌から覚えて、辞書で引いてみても見つからないので、親父の造語かもしれないと思ったのですが、ようやく小学館の『日本国語大辞典』で見つけました」[58]とその舞台裏を吐露しているが、松本高校入学当時、信州の自然に精神の理想郷を思い描いていた杜夫と茂吉の用法には一脈通じるところがあり、「係戀」（「係恋」）に茂吉と杜夫に共通する表現上の用法を指摘することができよう。また、杜夫は「茶がら」において、八月一日に松本高校の校長から訓辞を校庭で受けた後、大町の昭和電工へ行き、父と遠く隔たったときの心情に「係恋」を用いて、「遠く隔たってみると、父に対して、また係恋のような情が湧いてくるのであった」（傍点引用者）と記している。杜夫は当時の自分を振り返ったとき、茂吉に対しても「係恋」の情を抱いていたことを付記しておく。

当時、感傷的情況の最中にあった杜夫は、『朝の螢』との出会いにより、先に明らかにした、茂吉の身の上に襲いかかった相次ぐ辛い情況下で詠まれ、悲しく苦難の多い年に選定された作品を繊細に感受した。現実が辛く厳しいほどにその命は煌きを増していき、やがて杜夫は父茂吉の『朝の螢』（とりわけ『赤光』）の短歌に『寒雲』にも増して惹かれ、茂吉の短歌から、大自然と自分とが一体であるという独自な自然観を見いだし、対象となる自然や、更には茂吉に対してまでも係恋の情を抱くようになっていったと理解できる。

4　山形（金瓶）での出会い

ここまで「三、文学開眼から詠草へ」では『寒雲』の「木芽」との出会いにおいて、茂吉の周辺に起こった辛い出来事と作品に見られる悲傷性に触れながら、杜夫が東京での暮らしを懐かしみ

ながらも父の歌に共感を抱き、「木芽」の連作に一種の心境小説として感銘を受け、文学に目覚めていったことについて指摘した。更に、『朝の螢』との出会いにおいては、杜夫が好んだ茂吉の初期の作品『赤光』の歌を挙げ、『寒雲』にも増して懐かしく過去を追憶する当時の杜夫の心境を述べた。そして、それらの歌が作られた茂吉の六年間の相次ぐ悲傷事について触れ、選歌の際にも、病院の火災、多数の著書の喪失、病院の再建と、次々に追い打ちをかけてくるような辛苦の悲嘆の中での編集であったことを明らかにしてきた。一方杜夫もまた、空襲による喪失から精神の理想郷を求め、自立していこうとしていたことを述べ、茂吉と杜夫に共通する「係恋」を指摘し、「係恋」に象徴される「時空を超えて深く恋い慕いあこがれる」といった父茂吉の背中を追うように、杜夫もまた文学を志していくという二人に共通する心情について触れてきた。

さて、昭和二十年六月二十日頃『朝の螢』を手に入れ愛読し始めた後、杜夫は茂吉の疎開先、山形へ行き、七月二日から十日まで茂吉のもとで過ごすこととなる（一度目の金瓶での生活）。[59]そこで三度目の茂吉短歌との出会いがある。

先に本章の冒頭「（4）山形県金瓶村へ」にも触れたが、ここでもう一度山形（金瓶）での茂吉短歌との出会いについて、杜夫の晩年のエッセーにより確認する。

七月になって、食糧事情から寮が閉ざされ、山形に疎開していた父の許へ行き、父が散歩に出かけた隙にひそかに『赤光』『あらたま』などの歌を大学ノートに筆写した。これは家が焼けたあと、厄介になっていた親類の家で『寒雲』を貰い、それまで理科少年であった私が初めて父の歌を読んで文学に開眼したからである。この突如とした開眼は、やはり私が死と接してきたからなのではなかったか。[60]（傍点引用者）

茂吉の目の前で写せなかった理由を「だって、おっかないですもの（笑）」[61]と平成四年、六十五歳（『神々の消えた土地』出版年）の杜夫は本林勝夫との対談で照れながら本心を語っている。

ここで、晩年杜夫が「生き残りの記―私の昭和」（六十四歳）に改めて回想している「やはり私が死と接してきたからなのではなかったか」について、留意し検討していく。五月二十五日の東京最後の大空襲の夜、家が全焼したときのことは、『楡家の人びと』等に詳しく描かれているが、実際は「私はもっと危険な目にあっていたのだ」と、その時の情況を詳しく説明している。青山通りに火が迫り、避難者の群が青山墓地へ逃げていく頃、杜夫は、まだその辺りの家の小火災を兄嫁、妹らとバケツ・リレーで消し止めていた。そのあと御幸通りでがんばっている人と水をかければ火勢を抑えられると考え、青南小学校への細道を水を入れたバケツを持って走った。

その小路を出たとたん、無数の火の粉をまじえた熱風をまともにあびて、道にばったりと倒れてしまった。しばらく息がつけなかった。それからようやく死物狂いの努力でじりじりと這い、壁で熱風からさえぎられている小路に戻ることができた。まだ喉がむせて息苦しかった。家に戻った私は、ようやく母たちに避難命令を出した。家を捨てて逃げたのは、おそらく私たちがいちばん遅かったと思われる。その際、原っぱを横ぎるとき火の粉が目にはいって片目があかなくなったのは『楡家』に書いたとおりである。

御幸通りの広さを過信して熱風に打ち倒されたとき、ほん

の一二分時間がずれていたならば私は死んでいたかもしれない。あの空襲の日には、参堂の入口に焼けただれた死体の山が二カ所もピラミッド状に積みあげられていたのである。

（傍点引用者）

この「ほんの一二分時間がずれていたならば私は死んでいたかもしれない」という実感は、『楡家の人びと』では語れず、初老を迎え、ようやく晩年になって心の整理がついてきた杜夫が回想できた死の実感であったのではないだろうか。あの時、あと一二分時間がずれていたら、自分もあの死体の山の中に埋もれていたかもしれないと感じざるをえないほどの死の実感を伴う体験と、茂吉の『寒雲』に感動し『朝の螢』を手に入れ、文学に開眼し、山形（金瓶）で茂吉の短歌を筆写するという行為には、繋がりがあったかもしれないと、その内実を吐露しているように思われる。そこには『幽霊』において〈死〉を見つめ、神話の世界をイメージする主人公「ぼく」の姿が想起される。また、『神々の消えた土地』において戦争の最中、神話の世界に牧歌的でナイーブなダフニスとクロエーのような恋を体験する則雄の姿とも重なってくる。当時、〈死〉を実感していた杜夫が、山形で茂吉の短歌を筆写するという行為は、父の短歌に只管〈生〉への意志を見出そうとしていたことの現れであったと受け止めることができよう。死を実感として感じれば感じるほど、生きている瞬間のはかない命が益々愛おしく感じられるのも人間の事実ではないだろうか。そこに茂吉短歌の筆写があり、杜夫の短歌が詠まれていった。手帳「寂光集」には、あたかも『幽霊』冒頭の桑の葉を咀嚼していた蚕が糸を紡ぐように、自身の命の煌めきが表現されていった。紡がれていった糸はどのような光を放ち、桑の葉のような茂吉の初期の短歌がどのような陰影を『寂光』に映していったか、本論最終章四では具体的に明らかにすべく論を進めていきたい。

昭和二十年七月二日から十日までの山形（金瓶）滞在中に杜夫が筆写した『赤光』『あらたま』の短歌が何であったかはまだ明らかにされていない。この杜夫の大学ノートは「北杜夫展」（平成28、山梨県立文学館）で公開され、その内容の詳細は現在未公開である。

四、『寂光』の解釈

1 『寂光』の構成

杜夫には、その生涯に描き続けた膨大な小説・エッセーとは異なるジャンルの『寂光』という五十四歳時出版の唯一の歌集がある。『寂光』はその副題に「―北杜夫若年歌集」とあり、杜夫が十八歳から二十歳までの松本高校時代の三年間に作った短歌作品をほぼ当時のままに著した歌集である。

すべて、当時自分で「寂光集」と名づけた一冊の手帳によった。配列もそのままであるし、ちょっと手を入れたのは四首ほどである。他は漢字を平仮名にしたり、或いはその逆にしたりしたが、それもわずかなもので、九割はすべて黒表紙の小さなノートに書いてある原型そのままである。（「はしがき」傍点引用者）

三十四年という長きに渡って杜夫の筐底にあった作品群であるが、長い年月を経てようやく本歌集が出版されるに至った事情については、杜夫自身が『寂光』の「はしがき」に次のように記している。

この集には、生まれて初めて短歌みたいなものを作ったころのものまで、恥をしのんですべて収録した。物凄い稚拙な短歌から始まるが、理科少年であった私のことであるから、これはまあ仕方があるまい。

それよりも、私ももう老境で、いつ死ぬかもわからない。下手は下手なりに、あの当時は一所懸命に心根をこめて作ったものだ。それが死後、散佚してしまうかと思うと、自らの記念とするため、大恥辱をかくことを承知のうえで、思い切ってこのつたない歌集を出すことに決めたわけである。

（傍点引用者）

『寂光』の構成及び作品数は、年代を追ってほぼ時系列で掲載されており、次のように全体で四百六十首から成っている。（全体の歌数に対する割合）

昭和二十年作品、四十九首。（一割程度）
昭和二十一年作品、百八十二首。（四割程度）
昭和二十二年作品、二百二十九首。（五割程度）

（1）昭和二十年の構成

昭和二十年の作品は、冒頭より主な詞書を追っていくと「七月　山形にて」の六首から始まり、「王ヶ鼻」二首、「東京　六月、焼け跡をまた見に行って」二首、「青山墓地」一首、「私は山形からいったん東京へ戻り、また小金井の親類の家に数日世話になり、そして松本へ発った。　東京　七月」六首、「私は松本へ行き、（中略）上高地へ行った。島々の宿場で一晩泊まり、徳本峠の道は通れぬとも聞いていたので、バス道路を二人して延々と歩いて行った」七首、「上高地」の「温泉旅館」八首、「西穂高」二首、「（前略）松本から新潟まわりで山形へ（後略）」七首、「九月、学校が再開された」五首、そして、「十一月　外食券食堂」三首で構成されている。

冒頭の「七月　山形にて」から「上高地へ行った」までのみは、実際の時間経過と異なるため、その間を再度、時系列で追っておくとする。（「神河内」「茶がら」参照、○番号は『寂光』の記載順）

五月二十五日　東京大空襲。小金井の宇田家へ。（「寂光」③）
六月十五日　『寒雲』を手に、小金井の宇田家から一人松本へ向けて出発する。
六月二十日頃　思誠寮へ。
六月二十四日　王ケ鼻へ。（「寂光」②）
七月二日～十日　山形県南村山郡堀田村大字金瓶（現上山市金瓶）齋藤十右衛門方へ。（「寂光」①）
七月十三日　東京で軍隊の点呼を受けるため一旦東京へ。（小金井の家）（「寂光」④）
七月二十日　松本へ。
七月二十四日　上高地へ向かおうと島々宿の宿屋に泊まった。（「寂光」⑤）

梓川の水音聞きつつ垢じみし畳のうへに黙だしてゐたり
終電車の出で行く音を聞きながら目ざめてゐたりくらやみの中
闇なればはかなきもののせまりきて寝ねがてなくにまなこをつむる

七月二十五日　朝五時に宿を発って、バス道路を九里歩いて白骨温泉、山吹トンネル、坂巻、釜トンネル、

焼岳、穂高連峰を望む。上高地温泉旅館着。（「寂光」⑥）

七月二十六日　明神池へ、夕方梓川支流の川辺で沈思。

一人きてただ眺め入る川水は悲しきまでに速く流るる

現身のわれの眺める川水は悲しきまでに透きとほりゐる

梓川の音のみ高くこの峡は恐ろしきまで静まりにけり

七月二十七日　西穂高へ。（「寂光」⑦）

七月二十八日　（上高地滞在四日目、引用者記）岩名釣り。渓流の石の上に腰をかけて物思いにふけった。

七月二十九日　上高地に別れを告げ、徳本峠への道を帰途に着いた。

実際の時系列と『寂光』掲載順を比較確認すると、『寂光』は七月二日から十日にかけて、杜夫が初めて茂吉の郷里金瓶を訪れたところから始まり、六月二十四日の王ケ鼻、空襲直後の六月へと時間を遡るように記載されている。これは、詞書にも「歌集としては順番が前後するが、私のノートにはそうなっている」とあるように、短歌を杜夫が初めて詠んだのが六月であるものの、杜夫にとっては山形で茂吉の短歌を筆写した時の出来事が、当時最も印象深かったためと解することができよう。恐らく、それほど、金瓶に初めて行った時の茂吉短歌への憧れが心に深く刻まれていたことを物語っていると考える。それ以降の『寂光』昭和二十年の構成は実際の時系列と一致している。

（2）昭和二十一年の構成

昭和二十一年の作品は、前年昭和二十年と比較すると四倍近くも歌数が増し、杜夫の作歌意欲がうかがえる。その詞書を追うと、以下のように構成されている。「上高地行懐古」五首、「冬休み、大石田町の二藤部さん方に移った父のもとへ行く」（二月十八日から二月二十日滞在、引用者記）二首、「松本にて　五月」八首、「松田の婆や追慕」十三首、「箱根懐古」二首、「大石田　七月」（六月二十八日から八月二十三日大石田滞在、引用者記）八首、「旧作改作」二首、「大石田」二十首、「終戦懐古（昭和二十年八月二十一日作）」二首、「別れ（松本）」十首、「冬来（松本）」七首、「十月末」十五首、「十一月」十一首、「ファイアー・ストーム」四首、「初冬（連作）」十首、「十一月　寮の記念祭あり」七首、「十二月」三十六首、「世田谷の本院焼跡」五首、「松本」十首、「罹災懐古」五首。

昭和二十一年の構成で注目すべき点は、時系列の合間合間に「上高地行懐古」「松田の婆や追慕」「箱根懐古」「終戦懐古」「罹災懐古」と繰り返し過去の追憶が題材となっている点と、茂吉と過ごした大石田での二度にわたる生活詠が多い点を特徴としている。

杜夫の初期代表作『幽霊』[62]は言霊によって記憶を呼び起こし、魂の遍歴を描いた物語であり、フィクションではあるものの、杜夫の記憶や体験が基礎になっている。冒頭「人はなぜ追憶を語るのだろうか」と始まる『幽霊』は追憶によって自我の崩壊を踏み越え、アイデンティティーを確立していった教養的文学ともいえるが、最終章第四章の中ほどに、主人公が日本海側の北陸に向って汽車の旅に出かける場面があり、出かける前にこれまでの自分を以下のように振り返る。

この間、僕の生活は、およそ三つのことに規定されていた

と言ってよい。ひとつは遠い昔の記憶をよみがえらせること、ひとつはリューベックの詩人を嘆賞すること、他のひとつは、名も知らぬ少女に対する恋情ともつかぬ憧憬である。

（傍点引用者）

昭和二十一年の追憶を組み入れた構成については、連続して幾層もの追憶が題材とされているところ、日本海経由の北陸の旅など、『幽霊』第四章部分との近似点を見出すことができる。『幽霊』における追憶は極めて内的個人的な行為として全編に繰り返し描かれているが、主人公は丁寧に自己の過去を掘り起こしながら、死への親近感を伴う崩壊しそうな自己を取りもどそうとしていく。やがて主人公は覚醒の舞台となる北アルプスの槍沢の斜面にて、「〈夜〉の卵がひそかにくだける」ように星空やアルプスの夜景に神話の世界を見出し、精神の降誕を体験していく。『幽霊』は追憶の後に〈死〉への親近感から〈生〉への肯定へ向かっていく当時の杜夫の姿を描いているとも言えよう。『寂光』に詠われる追憶のモチーフとして〈生〉への意思を指摘しておきたい。

昭和二十一年の構成は、過去を追憶し自己の魂〈生〉を見つめながら、聴禽書屋にて係恋を抱くほどの茂吉と生活をともにした時期のことを中心に、時系列で掲載されていると捉えることができる。

（3）昭和二十二年の構成

昭和二十二年は、前年昭和二十一年と比較すると、歌数は更に四十七首増え『寂光』全体のほぼ半数が掲載されており、当時杜夫の作歌意欲が旺盛であったことを示している。また、昭和二十年、二十一年と比較すると、構成のスタイルが一変し、月毎の見出しを「一月集」のようにつけながら、順次「十月集」まで掲載されており、歌集としての体裁がより整ってきている。おそらく茂吉の歌集などを参考にしていたと思われる。各月の歌数は以下の通りである。

「一月集」八首、「二月集」六首、「三月集」五首、「四月集」十六首、「五月集」七十九首、「六月集」十八首、「七月集」十六首、「八月集」三十八首、「九月集」十七首、「十月集」二十六首。昭和二十二年十月で作品が終っている理由は、「一、杜夫と茂吉の年代記（松本時代）」に見てきたように、ファーブルに憧れて動物学を志望する杜夫に対し、杜夫を外科医にさせたいがため、成績を心配し「父の歌など讀むな」という茂吉に屈服し、医学部に進学するための勉強をしなければならなくなったからである。

昭和二十二年の顕著な特徴としては、四月以降の歌数の増加を指摘できる。とりわけ、五月は七十九首と、歌集の中でも一際多く詠まれている。この年、松本高校二年生の三学期ごろから杜夫は益々文学に関心を持つようになり、詩作も始めており、寮歌に「人の世の」が入選した。またその頃、山形の茂吉に歌稿を送り、○がつけられ、「父の赤光時代の歌に似ている。勉強の余暇に、少しずつ作ってみるがよい」[63]という意の返事をもらい、三度ほど歌稿を送っている点は年代記に述べたとおりである。茂吉のこの言葉が杜夫の背中を押していったこともあって、四月以降は歌数が増えていったと考えられる。対外的には卓球部主将、校友会運動部総務として、インターハイ、駅伝に活躍していた杜夫は、内外ともに充実した高校最後の年を送っていたと察することができる。そして、わずか半年ほどの間に情況は一気に逆転し、歌を断たざるを得ないこととなっていった。

以上、『寂光』の構成として、各年代の内容を概観してきたが、いずれの年においても、茂吉の存在や作品が大きく作歌そのものに影響し、『寂光』が構成されていったことを確認しておく。

2 『寂光』の特徴的な叙述

(1) 杜夫が語る茂吉の影響

杜夫の文学への開眼は父茂吉の短歌であることは、既に述べてきた通りである。『寂光』の叙述を見ていくに先立って、その事前情報として杜夫自身が父茂吉という人間を、またその短歌をどのように受け止めていたかについて触れておく。これについては、杜夫が茂吉評伝四部作等に度度述べている。『青年茂吉』でも評釈の合間に所感を述べている箇所がある。杜夫の茂吉短歌の享受を探る上で示唆されるところがあると考える。以下に注目したいところを列挙する。(以下の傍点引用者)

「まえがき」より

○「高校時代それを模した稚拙な歌を作ったものだ。」(P.ⅲ)

「Ⅰ 「赤光」時代」より

○「茂吉という男は野武士、野蛮人のごとき野太い神経の持主であるとともに、逆に気弱でほそぼそとした繊細な感覚の持主でもあった。(中略)「だが、この私も少しは父の血を受け継いでおり、躁病のときは父の三分の一ほど怒りっぽくなり、かつ旧制高校から大学にかけて、父の歌の中でもことさら感傷的なものをずっと好んだように、或る点では父と酷似した感傷家であった。」(PP.6～7)

○「赤茄子の……の歌は、一息に、しかも軽くリズミカルに詠いあげたもので、その解釈よりも、その哀愁のある調べの雰囲気に私は惹かれたのであった。」(P.32)

○「「赤光」を痛切に愛読し、そのために茂吉を好きになった。」(P.34)

○「高校時代の私は、「赤光」の初期にある比較的整った自然詠よりも、本職の歌人から見れば何だと思われるような歌を愛好した。」(P.68)

○「旧制高校時代の蛮カラ生活の中で、それゆえ一人でいるときはいっそう孤独に「おひろ」の歌に読みふけった(中略)「おひろ」は青年の感傷に包まれた漠たる存在で、それがどういう女性であるか不思議なほど考えなかった。なによりも幼い頃からあのように怕れ、正直のところ敬遠していた父、今は敬愛の気持を抱かせる父、そして生まれて初めて遠く離れて生きているそのような父の悲傷の念が、そのまま私の悲哀につながったのである。」(P.103)

○「父よりも若く、幾層倍も感傷的な少年と言ってよい年齢であった。母国は戦いに徹底的に敗れ、ただならぬ空腹感のうちに信州の自然のみがあまりに美しく存在していた。従って私の心情は、「さびしさびしいま西方にゆらゆらと紅く入る日もこよなく寂し」(赤光「おひろ其の一」)などという、あまりに「さびし」の多い歌をも嘉納したのである。」(P.104)

「Ⅱ 「あらたま」時代」より

○「松風が吹きゐたりけり松はらの小道をのぼり童女と行けば
目をとぢて二人さびしくかうかうと行く松風の音をこそ聞け
ともしびの心をほそめて松はらのしづかなる家にまなこつむりぬ

これはおそらく松高時代の私が、茂吉以上に感傷的であって、

とにかく「さびし」「悲し」という歌が、やたらと気に入った性格だったからかもしれない。「かうかうと」などは今となってはいくらか鼻につくものの、当時は「しんしん」と同様、好きで好きでたまらなかったものである。」（PP.177 ～ 178）

○「旧制高校生の頃、ずいぶんと感傷的であって、とにかく「寂し」「悲し」とあればその歌を愛好した。」（P.190）

○「二年生になった早春、島々谷を訪れた時のことである。（中略）小さな榾火を作り、上に組み合わせた木の棒に飯盒をかけた。そしてもう火が消える心配もなくなってから、私は安堵して、飯が炊けるまでのかなりの時間、じっとその榾火を見つめていた。するうち、だしぬけに、その炎の色合から何とも言いようのないもの寂しさが私の胸に忍びこんできた。事実、その時の低い炎は、かつて体験したこともない、一種特有に白みがかった色として私の目に映じたのである。（中略）私はとうに父の模倣であるつたない短歌をかなり作っていた。けれども、このときの島々谷の歌は一首もない。やはり孤独な心境のうちに焚きつけた、それまでに見た炎の色とはまったく異なる印象をどうしても表現できなかったからではあるまいか。（中略）「澄み透るまのいろの寂しさ」（まかがよふ昼のなぎさに燃ゆる火の澄み透るまのいろの寂しさ（あらたま）一首引用者付記）を、そのときの自分の心情の記憶とつい重ねあわせて、客観的な評価以上に感心した。」（PP.206 ～ 208）

このように杜夫は、野太い神経と気弱で繊細な父の血を受け継いでいることを自覚しながら、父茂吉の短歌を痛切に愛読し好きになっていった。そして、その哀愁のある調べの雰囲気に惹かれ、一人でいるときは、孤独に茂吉の歌に読み耽け、父の悲傷の念と一体となっていった姿が見えてくる。多感で感傷的な青年の心情で、茂吉の「寂し」「悲し」の歌を嘉納していったところを受けとめておきたい。

（2）「くれなゐの茂吉」の陰影

本林勝夫は「茂吉作品の語彙―言葉のイメージ」（『國文學』[64]）で「『赤光』の名を上げるまでもなく、赤乃至その色調は「現身のいのち」の徴標として茂吉の歌に頻出するものであり、時に消長起伏はあっても、それは「いのち」の一語、色彩的に一括要約すれば結局「くれなゐ」のイメージに収斂されるものだったのに違いない」と述べ、かつて塚本邦夫が茂吉の歌を「くれなゐの茂吉」と説いたことを紹介し、「赤」「くれなゐ」等の関連語句は茂吉の命に直結していることを指摘している。

また、「實相に觀入して自然・自己一元の生を寫す。これが短歌上の寫生である」（「第四「短歌と寫生」一家言」、「短歌に於ける寫生の説」（『齋藤茂吉全集第九巻』））と、生命の表現を「写生」に込めた茂吉であるが、そこには生きるが故の「悲哀・寂寥」も表現せざるをえなかったと述べ、生きとし生けるものの命のはかなさを嘆く声が「茂吉の歌集に充満して」おり、「寂しさ」「悲しさ」「はかなさ」「あはれ」等の詠嘆は、生きることのやむなさゆえの「一種の罪障意識」につながっている点を指摘している。また「その寂しさなり悲しみなりは感傷的な低湿性をおびることは少ない」とし、「感動の切実さ、激しさ、また深さが言うところの「いのちのあらはれ」を緊切に支えており、自然を対象とした歌でも、反応する心情表現が直接的、肉体的で、生そのものにひびくものを失っていない」と述べている。

先の本論「三、3『朝の蛍』との出会い」に列挙した杜夫の印象に残っている『赤光』の歌をみても、この「くれなゐの茂吉」の視点にみられる「悲哀・寂寥」の感を改めて確認することができよう。そして、本論「四、2（1）杜夫が語る茂吉の影響」で触れたように、杜夫にとっての模倣は単なる語彙の借用ではなく、茂吉の血（ＤＮＡ）を受け継ぎ、多感な精神的思春期に、父の悲哀や寂寥を自らに重ね、痛切に実感し、一体感を伴う深い共感のもと、詠嘆として表出せざるを得ない模倣であったと捉えることができる。本論では、「くれなゐの茂吉」の陰影がどのように『寂光』に描かれているか、その検証を以下にすすめていくとする。

（3）「寂し」の関連語句

「くれなゐの茂吉」に収斂されていったとも言われる茂吉の「いのち」はその作品の中に、「寂しさ」「悲しさ」「はかなさ」「あはれ」等の詠嘆となって表現された。それらの作品に感動した杜夫はどのように手帳「寂光集」に自身の命を紡いでいったのであろうか。まずは題名ともなっている「寂し」、更には「悲し」に目を向け、その頻出状況を確認した上で、それらの関連語句に着目し、その実際の使用を見ていくとする。

まず「寂し」は「さびしき」「さびしくも」「心さびしも」「寂しく」等に平仮名表記、漢字仮名表記、複合語的表記等使い分けがなされ、情況によって活用されており、使用時のデリケートなニュアンスに思いをこめたものと考えられる。また、このような形容語句の表記の使い分けはその他の心象表現語句にもしばしば現れ、杜夫の文字表記にはかなりのこだわりと配慮があることが感じられる。「寂し」は昭和二十年は五回（四十九首中）、昭和二十一年は十三回（百八十二首中）、昭和二十二年は十一回（二百二十九首中）、作品中総使用回数二十九回（全四百六十首中）となっている。「寂し」を用いた特徴的な作品を次に列挙する。（番号引用者）

1昏れゆけばくろき森辺にさびしくも鳴きかはしいるひぐらしあはれ
（「青山墓地」昭和二十年）

2畠中のさびしき駅よひつそりと暗き灯（あかり）に羽虫飛びくる
（「東京七月」昭和二十年）

3紫の水平線に佐渡ケ島の島影を見つ心さびしも
（「山形へ」昭和二十年）

4寂しさを堪へがたければ白樺の白皮をはぎぬあはれその色
（昭和二十一年）

5かにかくに寂しきものかこほろぎの声を聞くべく今宵（こよひ）はなりぬ
（昭和二十一年）

6夕光（ゆふひかり）のさしくる土手にひしひしと生きの寂しさ我おされつつ
（「初冬（連作）」昭和二十一年）

7川水のうづまくを見て人の世のつひに寂しとひとりごちけり
（「五月集」昭和二十二年）

8人の世のこの寂しさを知りそめて幾夜か経たる降る雨の音
（「五月集」「寂寥」昭和二十二年）

9山かぜのつたふる音をさびしみて硫黄の湯あみ一夜（ひとよ）をねむる
（「八月集」昭和二十二年）

ここでは各年度便宜的に三首ずつとりあげた。「寂し」の対象は杜夫が幼いころから憧れを抱いていた昆虫の「ひぐらし」「羽虫」「こほろぎ」をはじめ、「佐渡ケ島の島影」「白樺」「夕光」「川水」「雨の音」「山風」等自然の風物や情景にも及んでいる。特に昆虫については茂吉がしばしば歌に詠んだ「いとど」「蟻」「螢」「慈悲心鳥」

「蠅」「ぶと」等をはじめ、歌集全体では杜夫が折々に詠んだ昆虫等は、延べ数で七十六回の関連語句の表出を確認することができる。当時の杜夫が死を意識し、命のはかなさを感ずれば感ずるほど、対象と出会ったとき、鮮烈な感傷性が彼の命をふるわせ、自分が対峙している昆虫や自然に対して寂寥感を詠嘆せざるを得ない心境となっていったと推察される。「くれなゐの茂吉」の詠嘆的語句として「寂し」に目を向けながら関連語句の一部を見てきたが、杜夫が「寂し」と命をふるわすような彼の寂寥感と対象が彼の内面では混然一体となって融合し、抒情性を醸し出しているとすら受けとめられ、昆虫や生きもの、自然の情景に接した杜夫は命の共鳴を実感していたとも読み取れてくる。以上の観点から、『寂光』においては「くれなゐの茂吉」の「寂しさ」の変奏的な関連語句として、頻出する昆虫や自然の情景、風物を位置づけることも可能であろう。と考えると、その寂寥感は作品全体を覆い、反復されるごとに益々増幅されていくようにさえ読み取れてくる。

掲載した歌の幾つかについてここで若干検討しておく。一首目の「昏れゆけばくろき森辺にさびしくも鳴きかはしいるひぐらしあはれ」は、杜夫が戦災にあった後、思誠寮に入る前の六月に初めて短歌を手帳に記した頃のもので、空襲後に「青山墓地」付近を訪れた時の作品であるが、青山墓地付近は空襲の際、杜夫一家が逃れ集った地であり、死と直面した場所であった。この歌を詠んだ時点、杜夫はまだ自らの死を覚悟していた頃であり、「ひぐらし」の鳴き交わす声が一層彼の喪失感や寂寥感、悲傷感を増幅・拡大していったと予想される。また一首は、「くれなゐ」の茂吉を連想させる心象表現「さびしも」「あはれ」を重ねて用いており、そうせざるを得ないほどの深い寂しさの詠嘆にその特徴を見出すことができよう。

筆者はもとより杜夫の短歌表現上の巧拙を述べる立場ではない。本論は杜夫が「下手は下手なりに、あの当時は一所懸命に心根をこめて作ったものだ」という、その「心根」に迫り解き明かしていく立場であることをここに明記する。

四首目「寂しさを堪へがたければ白樺の白皮をはぎぬあはれその色」は、昭和二十一年二月十八日から三十日までしばらく大石田の聴禽書屋を訪れた後、五月に松本にもどり、「松田の婆や」を追慕した後の作品である。短歌の配列からして、その年の春から初夏にかけての松本での体験であろう。その後夏休みに大石田に長期滞在する直前の作品で、追憶モチーフが顕著になりつつあり、内面的には〈生〉への肯定に向かって詠草意欲も高まっていった時期である。杜夫は松本高校校友会の新聞や療報に短歌を発表するほどとなっていた。「教師からして変である」[65]には昭和二十一年当時について、以下のように記述し、連作「一本道」（『あらたま』）の歌を紹介している。

（前略）とにかく「寂しく」て「悲し」ければ、自分の心情にぴったりするのであった。（傍点引用者）

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり
野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命おとしかねつも
こころむなしくここに来れりあはれあはれ土の窪（くぼみ）にくまき光

こういう「一本道」のような連作を見ると、私はかくのごとき短歌を残した父のために、自分のことは放擲してガチ勉でも

し、一番となって老いてきた父を喜ばせようかと考えたことすらある。（傍点引用者）

作品「寂しさを堪へがたければ白樺の白皮をはぎぬあはれその色」も一首目と同様、「寂しさ」「あはれ」と寂寥感の表れる心象表現を重ねていることから、前年二十年の鮮烈な感傷性が杜夫の内面では続いており、寂寥感のただよう関連語句が昆虫にとどまらず、「白樺の白皮」等の様々な自然の風物にも変奏されていると理解できる。更にこの作品は茂吉の『赤光』（「死にたまふ母」）の次の一首を想起させる。

桑の香の青くただよふ朝明（あさあけ）に堪（た）へがたければ母呼びにけり

（傍点引用者）

『赤光』における順接の接続助詞の「ば」の特徴的な用法についてはかつて馬場あき子が「違和感と融和」[66]で次のように述べている。

二つのことを主として順接の「ば」でつなぐ、にもかかわらず二つのことがらの間には、ねじれや飛躍があるのが、茂吉の「ば」の特色である。それはまさに、無関係の二つのものを強靭な詠嘆の力によって収斂するという方法の発見なのでもあった。

下の句は、接続の必然性をもたらす「ば」によって導き出され、結果の詠嘆となっていく。杜夫のこの歌の場合、寂しさに堪えがたい心情と、一見無関係な白樺の皮をはぐという行為を、順接の「ば」でつなぐことで、何か必然がそこに感じられ、結果として「あはれその色」と皮をはいだ時の詠嘆の語句を用い、体言止めで言い切っているところに余韻が残る。

この茂吉の模倣とみられる順接の接続助詞「ば」の用例は筆者が『寂光』に当たったところ、先の一首目を含め四十箇所を確認し、文体の陰影の一つをここに指摘しておく。

最後に八首目の「人の世のこの寂しさを知りそめて幾夜か経たる降る雨の音」は松本高校三年の「五月集」に収められ、「寂寥」と詞書が一言添えられている。一首は、人として生きることの寂しさを感じるようになって幾夜が過ぎたであろうか、と松本高校三年の五月（杜夫の誕生月）に自己を見つめ静かに過去を振り返っている杜夫の姿が浮かんでくる。外にはただ雨の音、と体言止めで言い放つことによって、今も続いている「寂しさ」が雨の音と重なって心の中にいつまでも鳴り響いている、といった意味であろう。杜夫はその前年、昭和二十一年、松本高校寮歌に作品を応募し、採用されている。以下に歌詞を引用する。

松本高等学校昭和二十一年寮歌「人の世の」[67]

作詞　斉藤宗吉
作曲　松尾先見

一　人の世の美しきものを　萠え出づる落葉松の芽に
想ひつつ一人わけ入る　細道は幽か続きて
夕映の赤きころほひ　迷鳥の心慕ひぬ

二　人の世の清けきものを　わが歩みしばし止めて
かへりみる谿間の苔に　木漏日の斑にさして
厚かりし友の情けを　奏でつつ水流れ行く

三　人の世の悲しきものを　一夜寝し山小屋の灯の
ほそほそとゆらめく如く　語らへる刻は積りて
相抱く友の中より　生れ出でし真実なりしか

四　人の世の寂しきものを　先人の求め歩みし
この道は遂に音無く　長き影移ろふ涯に
安息の心抱くは　若人の幾人ならむ

寮歌歌詞の解釈は省くが、特に題名「人の世の」は八首目の短歌と共鳴し、人の世に生きるものの悲哀の詠嘆を繰り返し表現していると言えよう。万葉集における長歌と反歌のように、杜夫の寮歌と一首を味わうこともできるであろう。

また、この「人の世の」の一首と九首目に挙げた「山かぜのつたふる音をさびしみて硫黄の湯あみ一夜をねむる」は生前の杜夫が筆者宛の年賀状に載せた短歌（「人の世の」平成九年年賀状、「山かぜの」平成二年年賀状）であり、おそらく杜夫にとっても自己評価の高い比較的好きな二首であったと察することができる。

（4）「悲し」の関連語句

「悲し」は「かなし」「悲しき」「うらがなし」「悲しからずや」「まがなしく」「愛（かな）しみ」「悲しも」「慈悲心鳥」等と、「寂し」と同様に平仮名表記、漢字仮名表記、接頭語との結合、詠嘆の終助詞との結合、反語表現との結合、更には、類義語や関連語句への言い換え（含意性の拡大）等、様々な情況によって使い分けがなされている。

各年度の「悲し」の使用頻度の情況をみると、「悲し」（関連語句「慈悲心鳥」「愛しみ」等を含む）は、割合的には「寂し」より増加している。三年間を通じて「寂し」は二十九回であったのに対して、「悲し」は四十四回と使用頻度が高い。杜夫の止むことのない悲傷感と短歌創作への熱意、茂吉への憧れ等が推察される。各年度の情況は、昭和二十年は二回（四十九首中）、ところが昭和二十一年になると「悲し」は一気に使用率が十倍を超え、二十二回（百八十二首中）、更に昭和二十二年は十九回（二百二十九首中）となっている。「悲し」及びその関連語句は、先に観てきた「寂し」及びその関連語句と相まって、その悲哀と寂寥の情を醸し出している。次に、「悲し」に視点を置いて、特徴的な作品を列挙する。（番号引用者）

1現身（うつせみ）のわれの眺める川水は悲しきまでに透きとほりゐる
（「上高地」昭和二十年）

2梓川の水際（みぎは）にくれば川水は悲しきまでに早く流るる
（「上高地行懐古」昭和二十一年）

3午睡よりふいと目覚めて気持ちわるし汗の臭ひを嗅ぐはかなしき
（「大石田」昭和二十一年）

4ひとときをかなしくなれどこの心はふりはてんと本拡げけり
（「十一月　寮の記念祭あり」昭和二十一年）

5星ひとつあなかなしもよ星一つ暗黒の夜を流れけらずや
（昭和二十一年）

6赤土の道は愛しも稚くて吾の通へるこの細道は
（昭和二十一年）

7まながなしくひとり岩かげに入りにけり絶ゆることなき山の水の音
（「六月集」昭和二十二年）

8慈悲心鳥の声とだふとき更けしづむ山峡（やまかひ）にして眼（まなこ）を閉じぬ
（「六月集」昭和二十二年）

9ラスコリニコフの心も怪（け）しく短か世の悲しみを見む夜半のたま

ゆら

（「八月集」昭和二十二年）

掲載した歌の幾つかについてここで若干触れておくとする。

まず一首目の「現身（うつせみ）のわれの眺める川水は悲しきまでに透きとほりゐる」について検討する。昭和二十年七月二十四日から二十九日まで、杜夫は与曾井豊の道案内のもと、初めて憧れの上高地を訪れた。その折の作品が昭和二十年の中ほどに十七首まとめて掲載されており、一首はその十番目の作品である。「死ぬ前に一度」（「詞書」の一部、引用者記）とあるように、戦況が徐々に悪化に向かっていく中、杜夫は先の「地獄の体験」を経て、生命の不安と死の覚悟を抱きながら、憧れの穂高に向かった。戦争とはまったく無関係に延々と営まれている信州上高地の自然に出会い、「現身」の命を自覚し、悲しみを嘆かざるをえなかったと考えられる。上高地十七首中梓川（「川水」）そのものを歌った歌は五首、本一首はその中の三番目の作品である。梓川（「川水」）が悲しくなるほどに透きとおっていると嘆いている。「現身」は、茂吉が『赤光』に「うつし身の」「現身は」等と好んで用いた語句であり、人間の生命の現実（うつつ）の身を強く実感した語句で、生の嘆きすらふくまれているように受けとめられる。

次に二首目の「梓川の水際（みぎは）にくれば川水は悲しきまでに早く流るる」について検討する。一首は昭和二十一年作品の冒頭「上高地行懐古」の四番目の作品である。この懐古は五首連作の形をとっており、本一首は、前掲の一首と同様梓川を詠んでいるが、懐古しながら歌っているところがこの歌の特徴である。憧れの上高地を訪れた杜夫の脳裏には、その後もしばしば悲しいと感じたほどの梓川を思い出さざるをえなかったことであろう。一首は「悲しきまでに早く流るる」とその流れを形容する。杜夫の記憶はその流れの速さまで確かに思い出されるほど鮮烈であった可能性がある。梓川を、見ては悲しみ、また思い出しては悲しむという当時の杜夫の感傷性が非常によく伝わってくる。もちろんこの悲しみのリフレーンは、当時杜夫が上高地で目にした「唐松の細木」「穂高の山」といった語句とも相関しながら懐古の連作を織り成していると読み取ることができる。

つづいて三首目の「午睡よりふいと目覚めて気持ちわるし汗の臭ひを嗅ぐはかなしき」について検討する。昭和二十一年の六月二十八日から八月二十三日まで、松本高校時代では最も長期にわたって、杜夫は山形の大石田「聴禽書屋」で父茂吉と一緒に生活をした。詞書に「大石田七月」とあることから一首はその時の作品である。茂吉の「日記四、昭和二十一年」によると「七月三十日　火曜、クモリ、宗吉$^{38°}$　風強○宗吉風引キ（38°）臥床。」「七月三十一日　水曜、クモリ、夕晴、宗吉夕食時$^{37°}$」「八月十二日（中略）○宗吉 36°7、カラ 37°5、ソレカラ 39°。マデニナリ、少シク下痢、アスピリン二度服用、水枕、夜 38°5、」「八月十四日（中略）○朝霧、朝涼、日記、宗吉下熱、かゆ食ス」（茂吉の体温表記は日記に準ずる、引用者記）とあり、杜夫が二週間以上も夏風邪に罹っていたことがわかる。「大石田七月」には、「螢」「ひぐらし」「茶立虫」「蛙」「水すまし」「秋虫」等、昆虫の様子をしみじみと悲傷的に詠んだものが先にあり、つづいて、本一首が掲載されている。茂吉日記の七月三十日に「宗吉風邪引キ」とあることからすると、本一首はその頃の作品と思われる。その後、熱で臥床中の心細く、うら悲しい作品が十首ほど続いている。杜夫がすでに尊敬の念を抱いていた父茂吉との生活を楽しみにしていたにもかかわらず、

途中で風邪に罹ってしまったと感じた時の悲しい心情が表れている素朴な一首と解釈する。

六首目の「赤土の道は愛しも稚くて吾の通へるこの細道は」は昭和二十一年の中ほどに掲載されている。「十二月」(詞書)以降は、寒々とした冬の月、西寮での寂しい暮らしを詠みながら「世田谷本院の焼跡」「松本」「罹災懐古」と歌を紡いでいる。一首は、「松本」と「罹災懐古」の中ほどに載せられている。当時の杜夫は八月の大石田滞在の後、九月一日以降は、西寮総務、卓球インターハイ出場、記念祭宣伝部長、演劇出演と高校生活を謳歌していながら、一人になると、度々過去を追憶し作品を作っていたようである。戦災から半年ほどたった昭和二十年十二月一日、寮が食糧難になり閉寮、学校も春まで四か月の休校となったことがあった。その間杜夫は宮尾家、その後は兄茂太が見つけた杉並区の家に滞在し、本院跡を「なにかしら懐旧の念に駆られて訪れてみたことがある」(「根津山」『母の影』)と述懐している。一首は、そうした懐旧の念にひかれた杜夫の現実の感慨を詠んだものであろう。詠草月日は定かではないが、変わり果ててしまったかつての生活の地を訪れ、悲傷の念にかられながら数首を詠んだと理解できる。

歌の内容からして「赤土」は、少年時代にしばしば青山の自宅から昆虫採集に出かけた根津山の森への細道であった可能性がある。少年時代に「足音を忍ばせながら、恐る恐る分け入っていった」(「根津山」『母の影』)という「この細道」に立った杜夫は、たとえ戦災にあっても変わることなく残っていたかつて心躍らせ慣れ親しんだ「赤土の道」に、どれほどの愛しみを感じたことであろうか。その切ないほどの思い出の道を「愛(かな)しも」と嘆かざるをえなかったと推察される。「愛し」は万葉集以来の用法であり、茂吉、赤彦らが好んで使用しており、その模倣とも思われる。意味は「身にしみていとおしい、切ないほどにかわいい」という切実な心情を表している。

八首目の「慈悲心鳥の声とだふとき更けしづむ山峡(やまかひ)にして眼(まなこ)を閉じぬ」の「慈悲心鳥」は、「悲し」の直接的詠嘆ではなく、夏鳥ジュウイチの別称である。その「慈悲」の「悲」であり、や奇調とも言えるが、「悲し」の関連語句として茂吉との影響を見る上で加えておくとする。松本高校三年当時、杜夫は四月に寮を出て五月にはインターハイや駅伝に活動的であった時期であるが、その二首前に「槍沢行」(詞書)とあることから、一首も槍沢へ行った際の数首のうちの一首かと考える。「慈悲心鳥」の語は、茂吉十七冊の歌集の第五歌集『ともしび』(大14・1～昭3、青山脳病院院長として病院火災の再建に奮闘し苦難していた時期)に六回使われた語で、茂吉にとってはそれなりの思いが込められた語である。「さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑ聞けば光にむかふこゑならなくに」等の作品がある。茂吉自身はこの歌について「氷が瀬に一夜泊つて、終夜慈悲心鳥を聞いた時の歌である。慈悲心鳥は十一鳥ともいひ、ジッシーンと啼く、このこゑは切實で、佛法僧鳥とはまた別趣の味ひである。さうして夜鳥のこゑは鶯のごとき光明にむかふ性質でなくて、闇黒にむかつて沁み徹るやうな性質におもわれる。そこで、『光にむかふこゑならなくに』といひ表はした」(「ともしび抄」、「作歌四十年」)と記している。茂吉が「光にむかふこえならなくに」と捉えた時、慈悲心鳥の声は、絶望や悲嘆の闇の中にあっても、そこから光を見出そうとする茂吉の意識が見えてくる。杜夫はこうした父の歌集に既に前年の大石田滞在中等に出会っており、本一首に「慈悲心鳥」を用いたとすれば、悲哀を抱きなが

らも、山峡の静寂にひたりつつ卒業後の進路をどうしていくかと考えているように「眼を閉じぬ」の結句が読み取れてくる。

これらの他にも、四首目の「この心はふりはてんと」、五首目の「あなかなしもよ」はいずれも茂吉の『赤光』の次の短歌との類似性、模倣性を指摘することができる。

この心葬(はふ)り果てんと秀(ほ)の光る錐(きり)を疊にさしにけるかも

母が目をしまし離(か)れ來て目守(まも)りたりあな悲しもよ蠶(かふこ)のねむり

（傍点引用者）

前者は、未練がましい心を断ち切ろうとする意識から、衝動的行為につながっていったと理解できる。また後者は、「死にたまふ母」にあって、「あな悲しもよ」と高い悲嘆の声を上げているが、茂吉の実感がこもっており、杜夫はその強い悲嘆に共感し模倣したと考えられる。

また、九首目の「ラスコリニコフ」という西洋の固有名詞の使用も茂吉的で、「アナクレオン」「ドン・キホーテ」「ゴーガン」「シヨオペンハウエル」等茂吉が使用していた点との関連については、今後稿を改め、茂吉の近代精神と杜夫の西洋文学享受として、更に詳しく検討していく必要がある。

（5）「くれなゐ」の関連語句

ここまで、茂吉短歌の陰影について「寂し」「悲し」の関連語句（昆虫含む）を中心に、その使用状況と具体的な影響関係について、作品を通してみてきたが、最後に「くれなゐの茂吉」の陰影として、茂吉にとって「現身の命」に通じる「くれなゐ」「赤」「紅」系統の色調関連語句について、『寂光』の実際の情況を検討していくとする。「くれなゐ」のイメージに収斂されていく性質のものとしては、以下の関連語句を確認することができる。「昭和二十年」からは、「赤茶けし焼跡」「紅き山百合」「あかあかと宿の灯り」等全体で三箇所。「昭和二十一年」では「赤き表紙の本」「灯火」「にぶき灯」「赤き光」「螢の光」「黄葉赤葉」「柿の落ち葉」「炎」「赤き赤き入日」「あかあかと」「赤き炭火」「赤土の道」等延べ使用回数十七回の用例を確認することができる。また、「昭和二十二年」では「都の灯」「らふそくの灯」「入日赤き」「火事」「赤き服」「灯」「赤き本」「赤き」「赤く」「赤山蟻」「ほたる火」「赤子」「赤きつつじ」「梅干」「焚火」「楕火」「赤なす」「赤き月」「灯火」「らふそくの火影」「赤き林檎」等延べ二十四回の用例が見られる。いずれも「赤」「紅」と同色調の関連語句と捉え、その使用頻度の多さを確かめることができる。色彩には淡い「螢火」もあれば、「にぶき火」や「柿の落葉」「都の灯」などやや鮮明さに欠けるものから、「赤き炭火」「入日赤き」「赤き林檎」のように色調の濃いものまで起伏はさまざまである。しかしいずれにしても「くれなゐ」のイメージとして持つことができる関連語句が、年を追うごとに増加し、合計で四十四箇所となっている点は、顕著な特徴であると指摘することができる。このことから、茂吉の命が「くれなゐ」に象徴されるように、杜夫もまた、はかない自らのうつせみの命を愛しみながら、益々命の炎を見つめていたことと考えられる。以下に関連する各年度の特徴的な作品を列挙し検討を加える。

（番号引用者）

1際だてる岩のはだへにあはれあはれ紅き山百合の群りて咲く

（「上高地」昭和二十年）

2あかあかと宿の灯(あか)りのともるころ岸を離れて帰りゆくなり

（「温泉旅館」昭和二十年）

3疾風(はやち)ふく夜ふけゆきてひつそりと赤き表紙の本閉ぢにけり
（「松本にて　五月」昭和二十一年）
4しまらくを冬野の果ての赤き赤き入日のいろをもだしつつ見る
（「十一月」昭和二十一年）
5あかあかと火は燃えにけりあかあかとわれあらなくにただもえにけり
（「ファイアー・ストーム」昭和二十一年）
6あかあかと火はもえにけりあかあかとこの聖火(ひじりび)に我は死にたり
（「十一月　寮の記念祭」昭和二十一年）
7安らひの静けさと云はんあかあかと遠き野の果てに今し日は落つ
（「十二月」昭和二十一年）
8岩かげに一人夕飯を食ひにけり樹火(ほだび)恋しくくすぶりにけり
（「七月集」昭和二十二年）
9しみじみと手には冷きただ赤き林檎がぶりと噛みにけるかも
（「十月集」昭和二十二年）

最初の一、二首目は昭和二十年、杜夫が与曾井豊と初めて上高地を訪れた際の歌で、一首目は「紅き山百合」の群生と出会った際の感嘆である。北アルプスで見られる「紅き山百合」というと「車百合」が最も適当と考えられる。赤橙色に咲く「車百合」は、夏の穂高岳付近でよく見かける高山の植物である。ひと際生き生きと目を引いたことであろう。また、「あはれあはれ」は茂吉らしい歌語で、『あらたま』にも上の句から始まる杜夫が好んだ次の一首が有名であり、昂揚した情緒が独特の調べをもって表現されている。

あはれあはれここは肥前(ひぜん)の長崎(ながさき)か唐寺(からでら)の甍(いらか)にふる寒雨(さむあめ)

二語が重複する複合語の一つ「畳語」は、茂吉がしばしば好んで用いた特徴的な用法であり、二首目の「あかあかと」の他にも、「はるばると」「かんかんと」「ひしひしと」「くろぐろと」等多くの用例が見られる。この語法はここに例示した二、五、六、七首目の「赤き赤き」「あかあかと」、九首目の「しみじみと」にも情感をもって多用されており、杜夫の表現上の模倣がひと際明瞭である。

特に、五、六首目には「あかあかと」の畳語が二回も繰り返し用いられ、歌の出来不出来は別として、当時の杜夫がファイアー・ストームの火や寮の記念祭の聖火に、いかに自らのはかない命を重ねて感嘆していたかが読み取れる。更に、そのはかない自らの命の圧巻は、ついに炎と一体となり「我は死にたり」と言い放って感嘆の極みを体験するに至っている。そこには、感極まった杜夫の涙さえみえてくるような情感が滲み、その畳語には対象との一体感がただよう。

更に、「くれなゐの茂吉」と言われる代表作の一つとして挙げられる「一本道」の次の一首に照らして杜夫の短歌を検討する。

あかあかと一本(いっぽん)の道(みち)とほりたりたまきはる我(わ)が命(いのち)なりけり

一首は、赤々と夕日に染まる代々木原に、一本の道が遠く遥かに続いており、それが自分の生きていく道に他ならないという「玉きはる我が命」そのものを「あかあかと」と詠嘆の調べで表現している。こうした紅の色彩に含まれる生命感に共感した杜夫が、自らも好んで用いたものと考えられる。「くれなゐ」の関連語句には、こうした「はかない生命」の含意性を読み取ることができ、杜夫は「宿の灯」「入日」の残照、「火」「聖火」「樹火(ほだび)」「林檎」等に茂吉の「くれなゐ」に通ずる生命の証を感じ取っていたと考えられる。

三首目の、「赤き表紙の本」（詞書に「松本にて　五月」）とは何の本であろうか。書名が明かされずに色のみで表現されていることからわかる由もない。ふと脳裏に浮かぶのは、まさに朱（明るい赤）色の表紙の一冊『赤光』（東雲堂書店、大正二年十月十五日発行）である。『寂光』中に「ふち赤き本」ともう一度赤い本が詠まれた箇所を見つけることができる。それは三首目が詠まれた一年後の、昭和二十二年の「五月集」にある。

・ふち赤き本を開ける机こそ身をうちよせて泣くべかりけれ

奇しくも五月は杜夫と茂吉の誕生月である。杜夫は昭和二十二年、松本高校二年生の終わりごろ茂吉に歌稿を送り、茂吉から何首かに○がつけられた返信を受け取っている。当時の杜夫と茂吉との手紙のやりとりについては、『茂吉晩年』の「Ⅰ「小園」「白き山」時代」に詳しい。

昭和二十二年三月八日。松本市出川町の松高思誠寮西寮宛。大石田二藤部方より。（中略）「（前略）○三学期の成績も大体知らせてくれ。又もつと度々たよりをよこしなさい。○歌もたまには作つて見せなさい」（後略）

昭和二十二年六月十三日。「○歌よいところがある。著実に生活を歌ふ方がよい」

また、『青年茂吉』の「Ⅱ「あらたま」時代」には、杜夫が「やむを得ぬ熱情に駆られて」送った歌稿に対し「父が◎印をつけたもの」として以下の三首を紹介し当時の記憶を記している。

・きびしかりし冬逝かむとす静かなる雨の音ききひと日をこもる

（「三月集」、『寂光』昭和二十二年18首目掲載）

・目に沁む光となりぬたちまちにつゆくもりぞら雲開けつつ

（「五月集」、『寂光』昭和二十二年74首目掲載）

・萌えいでし青きが上に降る雪を床より出でて見てゐる吾は

（「五月集」、『寂光』昭和二十二年36首目掲載）

最後の「五月三日朝、桜もとくにすぎけるにあは雪の驚くばかり降りけるに」と詞書のある歌は、もっとも讃められたものと記憶している。

こうした茂吉とのやり取りの最中での先の一首「赤き表紙の本」であったと考えると、杜夫が詠んだ「ふち赤き本」も共に『赤光』と考えることはむしろ自然であろう。敬愛する父茂吉に歌を讃められ「読み終わった『赤光』を静静と閉じ」また、「自分がその本を開き涙するのは当然と改めて悟った」と、父茂吉への感嘆を詠っているのである。

おわりに

歌集『寂光』に採られた歌集名「寂光」の本来の意味は、『日本国語大辞典』によると、「仏語。①仏の真理である寂静（じゃくじょう）と智慧の光。または、その寂静のはたらきを光にたとえたもの。②「じゃっこうじょうど（寂光浄土）」の略」とある。杜夫は手帳の題をそのまま採ったとしているが、茂吉の『赤光』（仏説阿弥陀経の「赤色赤光」）に通じる音の響きをもっており、当時の杜夫が音そのものを意識して題したと推察することもできる。

題名『寂光』に込められた意味を彷彿とさせる叙述を『どくとるマンボウ青春記』の「初めに空腹ありき」に見出すことができる。杜夫は『どくとるマンボウ青春記』執筆当時において、かつて自分が目にした信州の光景を以下のように述べている。

こうして二十年以上経っても鮮明に網膜に残っているのは、

信州のひえびえとした大気の中にひろがる美しい山脈である。殊にその秋の私の心象を映してか、夕暮れの光景ばかり思いだされる。

西方のアルプスの彼方に日が落ち、松本平を薄もやがおおい、山々はうす蒼く寒々とした影を連なっている。草の実はいつ知らず地にこぼれ、タデもカヤツリグサも、根本々々にかぼそい虫の音をひびかせながら、うら枯れかかって霜を待っている。――そうしたもの寂しい光景だ。（傍点引用者）

歌集『寂光』は題名にも象徴されるように、静謐な寂寥感や悲哀が全体にただよっている。また、基本的には文語体で詠まれており、杜夫の実生活における素朴で直接的な心情を、率直・切実に実感をもって紡がれ、「けり」「かも」「かな」「や」「けるかも」等詠嘆の助詞、助動詞の使用頻度が高く、万葉調の茂吉の影響が見受けられる。本論では『寂光』において、「くれなゐの茂吉」に通じる語句はどのように表現されているかその陰影を明らかにすべく論を進めてきた。

おわりに、本論で解明を試み、明らかにされた主な点について箇条書きにし、次に記す。

○　杜夫と茂吉のそれぞれの年譜、参考文献をもとに杜夫の松本時代（昭和十九年から昭和二十二年）について杜夫・茂吉をセットにした年代記をまとめ、それぞれが各年代にどのような情況であったかを照合できるように整理して示した。

○　杜夫の松本高校志望の動機とその経緯の詳細について、現在可能な範囲で参考文献にあたり示した。杜夫が松本高校を志望した動機として次の三点を指摘した。

一、旧制松本高等学校第十五回卒業の叔父齋藤紀仁氏のアルバムを杜夫が見たことによる旧制高校生への憧れ。

一、生来の昆虫愛好家だったことから、信州の珍しい昆虫を見てみたいという強い願い。

一、穂高岳、槍ヶ岳をはじめとした北アルプス連峰、更には王ケ鼻や美ケ原等信州の豊かな自然への憧れ。

○　杜夫の松本高校入学決定に至るまでには、本人の希望と医者の道を歩ませたいという父茂吉の思惑との多少の差違があり、杜夫と茂吉双方が折り合いをつけようとするなかで、最終的には信州の地に明るく、松本に知人もいた茂吉が杜夫の願いを受け入れるという結果で受験、合格、入学となっていった。

○　松本時代、杜夫の文学の開眼がいかになされ、どのように自ら歌を詠むようになっていったか、昭和二十年の茂吉の短歌との出会いの詳細を文献から調べ、時系列でまとめ、杜夫の文学的心情が高まっていく様子を一望できるように示した。更には、茂吉短歌との出会いを三回の場面に分け、どのように文学（作歌）への意識が高まっていったかを、1『寒雲』との出会い、2『朝の螢』との出会い、3山形（金瓶）での『赤光』『あらたま』との出会い、と具体的に明らかにした。

○　杜夫が文学に開眼していく過程において、父茂吉への意識が頑固でおっかなく煙ったい父から、短歌の師として尊敬し崇拝するように変化していったことを指摘し、その様子を具体的に明らかにした。特に、『寒雲』の「木芽」（連作）を詠んだ当時の茂吉の悲傷の心境にもあたり、戦災によって喪失感を抱きながらも精神的思春期を迎えていた杜夫が、その悲傷性に共感し、心境小説的なところを杜夫が好んだ点を明記した。

○『朝の螢』との出会いでは、まず杜夫と茂吉双方にとっての本歌集の位置づけを明らかにした。その上で茂吉と杜夫の両者の表現に共通する「係戀（係恋）」の語に着目し、双方の具体的使用例を検討した。当時（昭和二十年六月十五日～八月一日頃）、感傷的な日々を過ごしつつも、杜夫が内面的に僅かずつ変容していった点を指摘した。

一、杜夫にとっては、懐かしく分かり易い内容であったことを、杜夫が好んだ具体的な作品を中心に検証し、中でも茂吉初期の『赤光』の印象が大きく、『寒雲』にも増して感動を強め、茂吉を崇拝していくほどになっていったことを指摘した。

一、茂吉にとっては、「巻末の小記」（『朝の螢』）、「作歌四十年」等の具体的な記述から、身辺に悲傷事が重なった六年間（大正元年から大正六年）に作られた作品であり、自選の際は、留学から帰国する直前の青山脳病院全焼を受け、病院再建の重荷を負った苦難の情況での選歌であったことを指摘した。

一、茂吉が「螢」の一首に込めた意味と同調性のある杜夫の『神々の消えた土地』の叙述に目を向け、当時大自然との一体感を杜夫が感受し、「係恋」の情を抱きつつ、徐々に生きることへの意志を見いだそうとしていた点を指摘した。

○『寂光』の解釈では、まずその構成について概観し、『寂光』の基本情報並びに構成の骨子について述べた。本歌集は、凡そ年代順に作品が配列されている。一、昭和二十年は冒頭の一部が時間を遡るように配列されているが、それ以降は時系列に沿って配列されている。二、昭和二十一年は追憶を基調としながら、大石田での茂吉との暮らしや松本での感慨が歌われている。三、昭和二十二年は茂吉の励ましもあって旺盛な作品作りを示しているが、徐々に進路について揺れていく様子や茂吉との相克に悩む様子が詠われて、医学を目指し勉強するため十月で作歌を断念している。

○『寂光』の解釈に当たっては、茂吉との影響関係のある語句に着目し、「くれなゐの茂吉」の視点から「寂し」「悲し」「くれなゐ」等の相関語句を中心に作品を検証し、茂吉短歌の「寂寥」や「悲哀」の陰影を具体的に明らかにした。

○『寂光』における茂吉の陰影が顕著にみられる「寂し」「悲し」「くれなゐ」等の語句が用いられた作品について、筆者なりの解釈を試みた。

北杜夫の短歌については、没後五年にあたる本年（平成二十八年）驚くべき未公開資料が山梨県立文学館の「企画展　北杜夫展―ユーモアがあるのは人間だけです―」にて公開された。館長の三枝昂之氏（日本歌人クラブ会長）は「『寂光』と『軽井沢歌稿』―歌人北杜夫を読む」[68]に、杜夫の短歌について以下のように紹介されている。

北杜夫晩年の歌稿がある。四百字詰めＢ４原稿用紙四枚、出版社等の依頼状など四枚の余白と裏。メモに近いものもあって歌数は判断が難しいが約百二十首にも及ぶ。北杜夫は毎年の夏を軽井沢西区の山荘で過ごしたが、そこに残っていた歌稿を喜美子夫人が発見、今回の企画展のために提供して下さったのである。歌人齋藤宗吉・北杜夫は旧制松本高校時代の創作ノートをまとめた歌集『寂光』の青年期に限られていたのではなく、晩年もひっそりと存在していたことになり、大変興味深い。（中略）「軽井沢歌稿」には「平成４年８月」

「1992.8.30」と記された二枚があり、その時期のものが多いと推測されるが、全体ははっきりしない。初恋の人を思い出し、娘の由香さんの結婚式を懐かしみ、つまり来し方を振り返りながら、歌稿が強く訴えるのは身体の衰えであり、迫る死である。

これまで医学部受験の昭和二十二年の松本時代の短歌を最後に歌人北杜夫の短歌は終わったとみられていた。しかし、父茂吉から受け継いだ杜夫の抒情的な短歌の心は彼の魂の深部に脈々と息づいており、様々な文学作品を形成し、晩年の折々を再び短歌で彩っていったことが明らかとなった。

・涙いずるたまゆらにして吾(あ)が父のおぼろなる影をまなかひに見つ
・思ひいずればあはれあはれ老残の姿なりせめてわが死にざまのいさぎよくあれよ
・老人の我は死にゆき孫は育つこれぞ自然の法則かと思ふ
・ヒロウエンは嬉しかれどもその最後に我はあがりて二度も礼を言ひ直す
・教会の結婚式で賛美歌を唱和するときわが妻はいくらかは泣きそうな顔をばしたり
・窓の外に灯(ひ)に集まりて羽ばたける小さき蛾(が)いくつか静かになりぬ
・短かかる蛍の生(しゅう)とあが生(しゅう)はとどのつまりは同じならむ

（「軽井沢歌稿」より。仮名遣い・ふりがなは原文の通り、引用者記）

ここで、『寂光』こそが、北杜夫文学の原点であったことに改めて思い至る。杜夫は『寂光』出版年（杜夫五十四歳）の十一年前、辻邦生との対談（「精神的思春期と文学」[69]昭和45年当時杜夫四十三歳）において次のように語っている。

ぼくたちは、いま中年だね。（中略）しかしあのころ初めて、偉大なる書物にも少しは触れたり、それから乳くさいながら真剣な思考に個人個人で浸っていたわけでしょう。そういうところで萌芽したものというのは、また回帰してくるね。年が経ると、めぐりめぐってくる。それで〈雀百まで……〉なんていう言葉もあるけれども、人間というものはやっぱり、また出発した地点に立ち戻ってくる。若い日の考え方というものは、あんがいその人間を一生支配するとも思うな。（中略）やはり若い日の直感的なものから、ひとりの人間は、それほど超えられないということが、あるかもしれないな。（中略）精神的思春期というものは、乳くさいようでいて、けっしてバカにならないと思う。（後略）　（傍点引用者）

杜夫自身が語る精神の「萌芽」と「回帰」を、松本高校時代の『寂光』と晩年の「軽井沢歌稿」と捉えることができよう。青年杜夫短歌のもつ豊かな抒情性は、その後、トーマス・マンとの出会いにより克明な叙事性が加味され、「滑稽と悲惨」のような西洋的対立命題の認識を深め、やがて、『楡家の人びと』をはじめとした裾野の広い彼の文学作品に結実していったものと考えられる。北杜夫文学における『寂光』のもつ価値は極めて高いものがあると言えよう。

本稿の冒頭で述べたように裾野の広い北杜夫文学という高峰の原点は、彼が多感な青春時代を過ごした松本の地であった。杜夫が逝去されて五周忌を迎えた本年、杜夫ゆかりの地である信州大学中央図書館（松本）にて、「没後五年展」が開催され、先年齋藤家から寄贈された六百冊余りにも及ぶ書斎の蔵書をはじめとした

「北杜夫文庫」が公開されたことに、心から感謝の念を抱いている。

筆者は、三十五年前に卒業論文（新潟大学）に拙稿「北杜夫論―初期作品における「幽霊」の位置―」を上梓して以来、様々な杜夫の作品に親しみ、敬愛し、細々とではあるが杜夫と交流をさせていただいてきた。毎年の年賀状は勿論のこと、三度ほどご自宅にお伺いし、面識の機会もいただいたことがあった。（詳細は「北杜夫訪問記」（1999 年 CiNii 収録論文）参照。）こうした杜夫との貴重な出会いを大切に、今後も北杜夫研究を一歩一歩進めていきたいと考えている。

本稿作成に当たり旧制高等学校記念館、斎藤茂吉記念館、大石田町歴史民俗資料館には資料のご確認ご協力等をいただいた。また先年、当時上高地に杜夫をご案内された与曾井豊氏と面識の機会を得、貴重な資料を提供していただいた。ここに感謝の意を表するものである。



https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/2c/Lilium_medeoloides_flower.JPG/800px-Lilium_medeoloides_flower.JPG

注

1　『寂光』（中央公論社、昭和56・4・10）

2　『マンボウ思い出の昆虫記―虫と山と信州と』（信濃毎日新聞社、平成25・7・13）

3　北杜夫、齋藤茂吉それぞれの全集「年譜」を基底とした。

4　杜夫の年齢は「年譜」『北杜夫全集　第十五巻』（新潮社、昭和52・1・25）収録の斎藤国夫編に準じて満年齢で記載する。

5　茂吉の年齢は「齋藤茂吉年譜」『齋藤茂吉全集　第二十六巻』（岩波書店、昭和51・7・28）により数え年で記載する。

6　「童馬山房」（どうばさんぼう）は箱根の山荘の庭に茂吉の設計で昭和十七年に建てられた書屋で、現在は上山の齋藤茂吉記念館にある。茂吉はこの書屋名を号として使った。昭和二十年、初対面の際に防空壕で酒を酌み交わしたというエピソードが残っている会津八一が齋藤茂吉邸を訪問した際、揮毫した作品「童馬山房」は早稲田大学会津八一記念博物館に所蔵されている。

7　「憂行」の雅号は、「『昭和風雲録』辺りから由来した、右翼的で感傷的な、つまり「混濁の世を憂い行く」という意味くらい」と杜夫自身が「珍しく沈んだ書きだし」（『どくとるマンボウ青春記』（中央公論社、昭和43・3刊行））に回想している。写真は昭和57年、思誠寮のかつての杜夫の部屋を訪ね筆者撮影。

8　母輝子は昭和八年（杜夫六歳）十一月に、その行状が『有閑マダム醜行暴露』という見出しのもとに新聞記事となるに及び、茂吉との関係に決定的な破綻が生じることとなった。以後、輝子は祖母や叔父・西洋のいた松原の脳病院（本院）に預けられることになり、この父母の別居状態は杜夫が松本高校に入学する直前まで続いた。

9　満田巖『昭和風雲録』（昭和17・1・1）
10　兄茂太の妻美智子（精神科医で府中市小金井宇田病院院長の宇田俠一・三重子の長女）の実家に当たる。
11　「笹巻のことなど」（『北杜夫全集第十五巻、人間とマンボウ・マンボウすくらっぷ』）に当時の様子が詳しく描かれており、「そのとき私は多分に感傷的な笹巻に関する幾つかの短歌を作った」と回想している。
12　「神河内」（自伝的小説『母の影』新潮社、平成6・5初出）参照。
13　茂吉の長女百子の嫁ぎ先。
14　「根津山」前掲注12参照。
15　松本高校の寮祭では「ジャンボン行列」と称して奇異な扮装の一団が街中に繰り出し茶番劇を打った。前掲注7参照。
16　「聴禽書屋」（ちょうきんしょおく）は齋藤茂吉が大石田疎開中に住んだ建物。写真は大石田町歴史民俗資料館隣の現在の聴禽書屋及び一階の額「千慮必有一得」（出典は『史記』「淮陰（ワイイン）侯列伝」）、当時杜夫が起居していた二階。平成27年5月、筆者撮影。
17　前掲注1「はしがき」より。
18　「斎藤茂吉　宗吉宛（長野県松本市県町北区中野太郎江方）昭和22・10・16、大石田二藤部方より（速達）」、『齋藤茂吉生誕130年記念　齋藤茂吉と『楡家の人びと』展』（世田谷文学館、平成24・10・6）図録参照。
19　前掲注7参照。
20　板垣家子夫（いたがきかねお）明治37～昭和57、大石田生まれアララギ派歌人、茂吉の愛弟子、大石田に茂吉を招き世話する一方、「白き山と最上川」の刊行を通して、「大石田と茂吉」のかかわりを広く全国に紹介した。『斎藤茂吉随行記―大石田の茂吉先生（上下巻）』（古川書房、昭和58・5・18）
21　前掲注12参照。
22　杜夫には、茂吉が明治二十九年に十五歳で上京し、齋藤喜一郎（のち紀一、青山脳病院の創立者、杜夫の祖父）の養子に入った後に喜一郎に生まれた西洋・米国・紀仁の三人の叔父がいた。旧制高等学校記念館（松本市県）の『旧制松本高等学校同窓会名簿』にて、昭和十一年度第十五回卒業生名簿、理科乙類に「齋藤紀仁」を確認することができた。
23　日本昆虫協会（東京）が企画。杜夫自らが主に中信地方で採集したカブトムシやトンボ等計649種1738匹が展示され、その中には信州甲虫研究会会長、平沢伴明が杜夫にちなんで命名した新種のコガネムシ「マンボウビロウドコガネ」も並べられた。（平成22年）
24　前掲注2参照。
25　前掲注2参照。
26　「古本屋の思い出」前掲注11参照。
27　平山修次郎著『原色千種昆虫図譜』
28　『試みの自画像・5　北杜夫による北杜夫』（青銅社、昭和56・6・25）
29　「おやじ」前掲注11参照。
30　平福一郎は当時東大病理解剖の助教授をしていた。
31　前掲注29参照。
32　前掲注29参照。
33　「書簡四」（『齋藤茂吉全集第三十六巻』）の「補遺昭和二十年、八九三三」参照。
34　「年譜」参照。片桐顕智『斎藤茂吉』（清水書院、昭和42・4・15）
35　前掲注12参照。
36　『齋藤茂吉全集　第三巻』所収。
37　「茶がら」『母の影』（前掲注12）
38　「茶がら」『母の影』（前掲注12）
39　高野公彦「『白桃』『暁紅』『寒雲』二本の緋色の糸―昭和十年代」（「國文學―解釈と教材の研究―没後四十年斎藤茂吉特集」（學燈社、平成5・1・10））
40　永井ふさ子『齋藤茂吉・愛の手紙によせて―あはれひとつの息を息づく―』（求龍堂、昭和56・11・10）
41　「寒雲抄」（『齋藤茂吉全集第十巻』岩波書店、昭和48・4・13）
42　「Ⅲ「寒雲」～「小園」時代」より。北杜夫『茂吉彷徨』（岩波書店、平成

8・3・8）

43　前掲注42参照。

44　新潮カセットブック「斎藤茂吉秀歌」鑑修・北杜夫、（新潮社、昭和63・6・20）

45　「ギリシャの恋愛詩人。食べていた葡萄が咽につまって死んだといわれている。」前掲注44の「鑑賞の手引き」参照。

46　自選歌集『朝の螢』（改造社、大正14・4）茂吉四十四歳、その後、『改造文庫第二部第五十五編朝の螢』（昭和4・7・21）が発行されるにあたり以下の「附言」が記された。「大正十四年に發行した「朝の螢」をこのたび、「改造文庫」に収めるに就いて、前の方に七十余首を増補した。卽ち明治三十年九月から明治四十五年までの作の中から選んで増補したので、私の作としては初期のものである。昭和四年初夏　齋藤茂吉記す」更に昭和二十一年に新装再出版の「後記」には、「本書は戦争中しばらく出版を中止してをりましたが、いよいよ平和となり、新時代に入りましたので茲に新装して二たび出版することとなりました。どうぞまた續々お讀みくださることをお願いたします。私は戦争末期に山形縣に免れまゐりまして、上ノ山、金瓶、大石田と移り住み、目下大石田に居ります。昭和二十一年八月　齋藤茂吉」（『朝の螢』改造社、昭和二十一年十一月十五日）とあり、三度の発行の歴史がある。

47　頭注『日本近代文学大系　第43巻　齋藤茂吉集』（角川書店、昭和45・1・10）

48　「巻末の小記」前掲注46参照。

49　「Ⅰ「赤光」時代」『青年茂吉』（岩波書店、平成3・6・27）参照。

50　『ダフニスとクロエー』は、2世紀末から3世紀初め頃の古代ギリシアで書かれた恋愛物語。ロンゴス作と伝えられているが、作者に関することはほとんど何もわかっていない。

51　『神々の消えた土地』（新潮社、平成7・9・1）巻末に「この作品は平成四年九月二十日に新潮社より刊行された」とある。

52　「あとがき」前掲注51参照。

53　齋藤茂吉『万葉秀歌上巻（全2巻）岩波新書（赤版）5』（岩波書店、昭和13・11・20）本文章は「第六巻、九一八、奥つ島荒磯の玉藻潮干満ち隠れゆかば思ほえむかも　山部赤人」の評釈。

54　『齋藤茂吉全集　第六巻』参照。

55　「Ⅰ「小園」「白き山」時代」（北杜夫『茂吉晩年』（岩波書店、平成10・3・16）

56　前掲注44「鑑賞の手引き」参照。

57　前掲注53参照。

58　北杜夫・本林勝夫「［対談］茂吉の歌・茂吉の人」前掲注39「國文學」参照。

59　「笹巻のことなど」参照。（『北杜夫全集　第十五巻』、「マンボウすくらっぷ―単行本未収録エッセイほか―」）

60　「生き残りの記―私の昭和」、北杜夫『人生のずる休み』（河出書房新社、平成25・10・30）初出、北杜夫『マンボウ氏の暴言とたわごと』（平成3・7）杜夫64歳。

61　前掲注58参照。

62　北杜夫『幽霊―ある幼年と青春の物語―』（中央公論社、昭和43・3・10）『幽霊』は杜夫が二十三、四歳の頃の処女作長編小説で、昭和二十五年に書き出され、昭和二十七年から翌年へかけて雑誌「文芸首都」に分載され、昭和二十九年に単行本として自費出版された。その後、昭和三十五年に中央公論社より出版された。「あとがき」参照。

63　前掲注1「はしがき」参照。

64　前掲注39参照。

65　前掲注7『どくとるマンボウ青春記』参照。

66　『短歌5月号特集・斎藤茂吉』（角川書店、平成元・5・1）

67　『松本まるごと博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録』（松本市立博物館、昭和25・7・13）

68　『企画展　北杜夫展―ユーモアがあるのは人間だけです』図録より。（山梨

県立文学館、平成28・9・1・）
69　北杜夫・辻邦生『北杜夫・辻邦生対談―若き日と文学と』（中央公論社、昭和45・7・10）

参考文献

1　『北杜夫全集』全十五巻（新潮社、昭和51・9・25～昭和52・11・25）
2　『齋藤茂吉全集』全三十六巻（岩波書店、昭和48・1・13～昭和51・4・30）
3　北杜夫『壮年茂吉』（岩波書店、平成5・7・29）
4　板垣家子夫『斎藤茂吉随行記―大石田の茂吉先生（上下巻）』（古川書房、昭和58・5・18）
5　柴生田稔『斎藤茂吉伝』（新潮社、昭和54・6・26）
6　斎藤茂太『茂吉の体臭』（岩波書店、昭和39・4・27）
7　奥野健男『北杜夫の文学世界』（中央公論社、昭和53・2・10）
8　谷沢永一・辻邦生『新潮日本文学アルバム14斎藤茂吉』（新潮社、昭和60・3・20）
9　『別冊新評「北杜夫の世界」』（新評社、昭和50・4・15）
10　「特集北杜夫の文学世界」『國文學　解釈と鑑賞』（至文堂、昭和49・10）
11　「追悼総特集　北杜夫どくとるマンボウ文学館」『文芸別冊』（川出書房新社、平成24・7・30）
12　福武哲彦『ぴーぷる最前線　北杜夫』（福武書店、昭和59・2・10）
13　御喜家康正『北杜夫の世界』（(株) 新評社、昭和54・6・1）